

省察

MEDITATIONES

神の存在、及び人間の靈魂と肉体との區別を論証する、第一哲学についての

DE PRIMA PHILOSOPHIA, IN  
QUIBUS DEI EXISTENTIA, ET  
ANIMAE HUMANAE A CORPORE

DISTINCTIO, DEMONSTRANTUR.

デカルト *Renati Descartes*

三木清訳



：

【テキスト中に現れる記号について】

≪≪：ルビ

〔例〕 惟 ≪おも≫う

〔#〕：入力者注 主に外字の説明や、  
傍点の位置の指定

（数字は、JIS X 0213 の面区点

番号、または底本のページと行数)

(例)※[#「又+回」、第4水準2-12-11]

---

【#ここから3字下げ】

神の存在、及び人間の霊魂と肉体との区

別を

論証する、第一哲学についての省察  
「#ここで字下げ終わり」

書簡

聖なるパリ神学部の

いとも明識にしていとも高名なる

学部長並びに博士諸賢に

レナトウス　　デス

カルテス

私をしてこの書物を諸賢に呈するに至らしめました理由は極めて正当なものでありますし、諸賢もまた、私の企ての動機を理解せられました場合、この書物を諸賢の保護のもとにおかれまするに極めて正当な理由を有せられるであろうと確信いたしますので、ここにこの

書物を諸賢にいわば推薦いたしまするには、私がその中で追求しましたことを簡単に申し述べるにしくはないと考える次第であります。

私はつねに、神についてと靈魂についてと、この二つの問題は、神学によってよりもむしろ哲学によって論証せられ



ねばならぬ諸問題のうち主要なるものであると、思慮いたしました。と申しますのは、われわれ信ある者には、人間の靈魂の肉体と共に滅びざること、また神の存在したまうことは、信仰によつて信ずることと十分でありますとはいえ、たしかに、信なき者には、まず彼等にこの

二つのことが自然的理性によつて証明せられるのでなければ、いかなる宗教も、またほとんどいかなる道德上の徳すらも説得せられうるとは、思われなからであります。そしてこの世においてはしばしば徳よりも悖徳にいつそう大きな報酬が供せられるのでありますから、も

し神を畏れず、また来世を期待しないならば、利よりも正を好む者は少数であるでありましょう。もとより、神の存在の信ずべきことは、聖書に教えられているところでありますから、まったく真でありますし、また逆に聖書の信ずべきことは、これを神から授けられたのであります。

すから、まつたく真であります。まことに信仰は神の賜物であります。ゆえに、余のことがらを信ぜしめんがために聖寵を垂れたまうその神はまた、神の存在したまうことをば我々をして信ぜしめんがために聖寵を垂れ得たまうからであります。とはいえ、これはしかし、信

仰なき人々に対しましては、彼等はこれを循環論であると判断いたすでありませうから、持ち出すことができませぬ。そして実に私は、単に諸賢一同並びに他の神学者たちが神の存在は自然的理性によつて証明せられ得ると確信いたされるということのみではなく、また聖書

からも、神の認識は、被造物について我々が有する多くの認識よりもさらに容易であり、まったくその認識を有しない人々は咎むべきであるほど容易であることが推論せられるということに、気づきました。これはすなわちソロモンの智慧第十三章の言葉から明かでありま

して、そこには、またそのゆえをもつて  
彼等は宥すべからざらなり「#」またそ  
のゆえをもつて彼等は宥すべからざら  
なり」に傍点」、けだし彼等もしこの世  
のものを賞で得るほど知り得たりとせ  
ば「#」「けだし彼等もしこの世のものを  
賞で得るほど知り得たりとせば」に傍

点」、いかにしてその主なる神をさらに容易に見出さざりしぞ「#」いかにしてその主なる神をさらに容易に見出さざりしぞ」に傍点」、とあるのであります。

またロマ書第一章には、彼等、弁解することを得ず「#」弁解することを得ず「に傍点」、と言われております。そして



また同じ箇所にある、神に就きて知られたる事柄は彼等において顕わなり「#  
「神に就きて知られたる事柄は彼等において顕わなり」に傍点」、という言葉によりまして、神について知られ得る一切のことがらは、他の処においてではなく我々の精神そのものにおいて求めら

るべき根拠によつて、明白にし得るとい  
うことが告げられていると思われるの  
であります。しからば、いかにして然る  
か、いかなる道によつて神はこの世のも  
のよりもさらに容易にさらに確実に認  
識せられるかを探究いたしますことは、  
私に無関係なことではないと考えた次

第であります。

また靈魂に關しましては、多くの人々はその本性は容易に究明せられ得ないと判断いたしており、そして或る者は人間的な根拠からは靈魂が肉体と同時に滅びると説得せられるのほかなく、ひとり信仰によつてのみその反対が理解せ

られるとすら敢えて申しておりますとはいえ、しかしレオ十世の下に開かれましてラテラン公会議は、第八会同におきまして、彼等を非とし、そしてキリスト教哲学者たちにかの人々の論拠を破り、全力を挙げて真理を証明するようにな命ずるのでありますから、私もまたこれを

企てることを恐れなかつた次第であります。

さらに私は、多数の不信者が神の存し  
たまふこと、人間の精神が身体から区別  
せられることを信じようと欲しない原  
因はまさに、この二つのことがらは従来  
何人によつても論証せられ得なかつた

と我らが申しますところ存することを知っておりますゆえに、もちろん私は決して彼等に同意するものではなく、反対にこれらの問題に対して偉大なる人々によつて持ち出されましたほとんどすべての根拠は、十分に理解せられませぬ場合には、論証の力を有すると考えて

おりますし、従つて私は前に他の何人かによつて発見せられなかつたような根拠はほとんど何も与え得ないと信じておりますとはいへ、しかもひとたびそれらすべての根拠のうち最もすぐれたものを克明に考究し、そして厳密に明瞭に解明し、かくてすべての人々の前に今後

これが論証であることを確かにしたし  
ますならば、哲学においてこれにまさる  
有益なことは為し得ないと思慮いたす  
のであります。そして最後に、私がもろ  
もろの学問におけるあらゆる難問を解  
決するための或る方法を完成いたしま  
したことを知っております或る者は――



——もちろんこの方法は新しいものではありませぬ。と申しますのは、真理よりも古いものはないのでありますから。けれども彼等は私がそれをしばしば他のことがらにおいて使用して実のり多かつたことを見ているのであります。——この仕事が私によつて為されるこ

とを切に請い求めましたゆえにかようにして私はこれについて若干試みるこ  
とが私の義務であると考えた次第であ  
ります。

さて私が為し遂げ得ましたほどのこ  
とはことごとくこの論文の中に含まれ  
ております。もつとも、かのことがらを

証明すべきものとして持ち出され得る  
であろう様々の根拠のすべてをこの中  
に集録することに努力いたしたわけで  
はありませぬ。と申しますのは、かかる  
ことは、何ら十分に確実な根拠を有しな  
い場合にしか、労力に値しないと思われ  
るからであります。かえって私はただ第

一の、何よりも重要な諸根拠をば、今これらを極めて確実な、極めて明証的な諸論証として提出することを敢えて致し得るような仕方、追求したのであります。なおまた私は、これらは、惟《おも》うに、人間の智能にとりましてはさらにすぐれた根拠を発見し得るいかなる道

も開かれていないような性質のものであるということ、付け加えるであります。すなわち、ことがらの緊要性と、これがことごとく関係するところの神の栄光とは、この場合私の習慣の常とするよりもいくらか無遠慮に私の仕事について語るように私を強要する次第で

あります。もつとも私は、私の根拠を確  
実で明証的なものと考えますにしても、  
それだからと申してすべての人の理解  
力に適合しているものとは信じませぬ。  
まことに幾何学におきましては、アルキ  
メデス、アポロニオス、パツポス、ある  
いは他の人々によつて多くのことが書

かれておりますが、これはもちろん、それ自身として見られるならば認識するに極めて容易でないような何物も、またそれにおいて後続するものが先行するものと厳密に関連しないような何物もまったく含まないゆえに、すべての人によつて極めて明証的でまた確実なもの

と看做《《みな》》されておりますとはいうものの、しかしそれはどちらかといえは長く、そして非常に注意深い読者を要求いたしますから、まったく少数の者によつてのほか理解せられないのであります。あたかもそのように、私がここに使用いたしますものは、确实性と明証性と



におきまして幾何学に関することがら  
と同等あるいはこれを凌駕しさえする  
と私は認めておりますとはいえ、しかし  
多くの人々によつて十分に洞見せられ  
得ないであらうと恐れる次第でありま  
す。すなわち、一つにはこれらもどちら  
かといえば長く、そして一は他に依繋い

たしているからであり、また一つには主として、先入観からまったく解放せられた、自己自身を感覚の連累から容易に引き離すところの精神を要求するからであります。そして確かに世の中には形而上学の研究に適する者は幾何学の研究に適する者よりも多く見出されないの

であります。さらにまた次の点に差異が  
存しております。すなわち、幾何学にお  
きましては、すべての人が、確実な論証  
を有しないいかなることがらも書かれ  
ない慣わしであると思じておりますゆ  
えに、精通しない者は、真なる事柄を反  
駁することにおいてよりも、偽なること

がらを、これを理解すると見せ掛けようと欲しまして、是認することにおいていっそうしばしば過ちを犯すのであります。すが、これに反して哲学におきましては、双方の側において論争せられ得ないいかなることがらもないと信じられておりますゆえに、少数の者のみが真理を探

索し、そして大多数の者は敢えて最もすぐれた説を攻撃することによつて、智能ある者との名声を得ようと努めるのであります。

かるがゆえに、私の根拠がいかなる性質のものでありましようとも、ともかく哲学に属しているのでありますから、諸

賢の庇護によつて助けられるのでなければ、それらの根拠をもつて労力に値する大きな効果を挙げ得ようとは、私は期待いたしませぬ。しかるに諸賢の学部につきましてはすべての人が深く尊敬の念を抱いており、またソルボンヌの名ははなはだ權威を有しており、かくて単に

信仰に関することがらにおいて聖なる  
公会議に亜《つ》いで諸賢の団体ほど信  
頼せられているおよそいかなる団体も  
存しないのみでなく、また人文的な哲学  
におきましても、他のいずこにも「#」い  
ずこにも「は底本では「いずこも」さ  
らに大きな明察と堅実性とが、また判断

を下すにあたってさらに大きな健全性と叡智とが存しないと看做されているのであります。かるがゆえに、もし諸賢においてこの書物に対しまして、まず第一に「#「第一に」に傍点」、それが諸賢によつて訂正せられますように、――

――すなわち、単に私の人間的な弱さのみ



でなく、何よりもまた私の無知を想起いたしまして、この書物の中に何らの誤謬も存しないと私は確信いたしませぬ。――

――次に「#「次に」に傍点」、欠けていることがら、あるいは十分に完全でないことがら、あるいはさらに詳細な説明を要求することがらが、諸賢みずからに

よりまして、それとも、諸賢から告げられました後に、少くとも私によりまして、附け加えられ、完全にせられ、闡明せられますように、そして最後に「#」最後に「」に傍点」、神の存したまうこと、また精神の身体とは別のものであることを証明するこの書物の中に含まれる根

抛が、実にこれを極めて厳密な論証と看  
做さねばならぬほどまで、明瞭性に達せ  
しめられました後に、——私はそれが  
かかる明瞭性に達せしめられ得ると確  
信いたしております、——諸賢がまさ  
にこのことを言明し、公に証言して下さ  
いますように、かように高配を賜ります

ならば、その場合には、これらの問題についておよそ存しましたすべての誤謬はまもなくもろもろの人間の精神から拭い去られるますことを、私は疑わないのであります。すなわち、真理そのものは容易に余の智能の士並びに博学の士が諸賢の判断に同意いたすようにする

でありましよう。また権威は、智能の士とか博学の士とかであるよりもむしろ多くは一知半解の徒であるのを慣わしといたします無神論者が、反対する心を棄てるように、それのみかは、おそらくすべての学識ある人々によつてそれが論証と看做されていることを彼等が知

つているところの根拠を、理解せぬと思われたくないために、彼等みずから弁護するようになさえ、するでありましょう。そして最後に、その余のすべての者はかくも多くの証拠に容易に信をおくでありましょう。そしてもはや世の中には神の存在とか、人間の靈魂と肉体との実在

的な区別とかを敢えて疑う者は誰もないでありましょう。そのことがいかほど有益であるかは、諸賢みずから、諸賢の並々ならぬ叡智において、すべての人のうちで最もよく評価せられることができ、る次第であります。つねにカトリック教会の最大の柱石であらせられた諸賢

に、神と宗教とに関することがらをこれ以上の言葉を費してここに推薦いたしますことは、私にはふさわしくありません。ごめんなさい。

「#改訂」

読者への序言



神及び人間の精神に関する問題は、すでに少し前、フランス語で一六三七年に公にせられた『理性を正しく導き、もろもろの学問において真理を求めらるための方法の叙説』の中で、私は触れた。もつともそれは、この問題をかしこで厳密

に取扱うためではなく、ただこれにちよ  
つと触れて、読者の判断から、いかなる  
仕方でも後にこれを取扱うべきかを、知る  
ためであつた。というのは、この問題は  
私には極めて重要なものと思われたの  
で、一度ならずこれについて論じなけれ  
ばならぬと私は判断したのである。また

この問題を説明するためには私が辿る道は、ほとんど先蹤のないもので、一般の慣用から極めてかけ離れたものである。この道で、智能の脆弱な者がこの道を自分も歩まねばならぬと信じると悪いから、これをフランス語で書かれた、差別なしにすべての人に読まらるべき書物の中で、あ

れ以上詳細に述べるということは、益のないことと考えたのである。

しかし私はかしこで、私の書物において何か非難に値いすることがらに出会ったすべての人に、これを私に知らせていただくようお願いしたが、右の問題について私が触れたことがらに関して、

二つしか注目不值いする駁論は出なかつた。この駁論に対して私はここで、右の問題のさらに厳密な説明を企てるに先立つて、簡単に答えたい。

第一の駁論は、自己に向けられた人間の精神は、自己を思惟するものであるとしか知覚しないということから、その本

性すなわち本質「# 「本質」 に傍点」は  
ただ、思惟するものであることに、この  
ただ「# 「ただ」 に傍点」という語がお  
そらくはまた靈魂の本性に属すると言  
われ得るであろう余のすべてを排除す  
る意味において、存するということとは帰  
結しない、というのである。この駁論に

対して私は答える、私もまたかしこで余のすべてを、ものの真理そのものに関する秩序において（これについてもちろん私はあるとき論じたのではない）排除しようとするのではなく、かえって単に私の知覚に関する秩序において排除しようとするのである、と。かくてその

意味は、私の本質に属すると私が知るものとしては、私は思惟するもの、すなわち自己のうちに思惟する能力を有するものであるということのほか何物も私はまったく認識しないということであった、と。しかし以下において私は、いかにして、そのほかの何物も私の本性に



属しないと私が認識することから、また実際にそのほかの何物も私の本性に属しないとということが帰結するかを明白にするであらう。

もう一つの駁論は、私が私のうちに私よりも完全なものの観念を有するといふことから、この観念が私よりも完全で

あるということ、ましてこの観念によつて表現せられるものが存在するということは帰結しない、というのである。しかし私は答える、この場合、観念なる語に両義性が伏在すると。すなわち、それは一方質料的に、悟性の作用の意味に解せられることができ、この意味において

は私よりも完全とは言われ得ないが、他方それは客観的に、この作用によつて表現せられたものの意味に解せられることができ、このものは、たとい悟性の外に存在すると仮定せられなくとも、自己の本質にもとづいて私より完全であり得る、と。しかし、いかにして、ただこ

のこと、すなわち私のうちに私よりも完全なものゝの観念があるといふことから、かのものが実際に存在するといふことが帰結するかは、以下において詳細に解明せられるであらう。

ほかに私は二つのかなり長い文章を見た。しかしその中では右の問題について

ての私の根拠ではなくむしろ結論が、無神論者たちのきまり文句から借りてこられた議論でもって駁撃せられているのである。ところで、この種の議論は、私の根拠を理解する人々の前では何らの力も有し得ないからして、また実に、多くの人々の判断は弱くて正しからず、

たとい偽であり、理を離れたものであつても、最初に受け取った意見によつてのほうか、真で堅固な、しかし後に聞いたその反駁によつてよりも、いつそう多く説得せられるものであるから、ここではその議論に対して私が最初に述べねばならぬとすると悪いから、答弁すること

を欲しない。そしてただ一般的に私は言  
つておこう、神の存在を駁撃するため  
無神論者たちによつて通例持ち出され  
る一切は、つねに、人間的な情念が間違  
つて神に属せしめられることに、あるい  
は僭越にも、神の為し得ることまた為す  
べきことを決定しまた理解することま

でを我々が欲求し得るほど多くの力と  
智慧とが我々の精神に属せしめられる  
ことに、懸つており、かくて実に、我々  
がただ、我々の精神は有限で、神はしか  
し理解を超え無限であると考えねばな  
らぬことを忘れない限り、かの論駁は  
我々に何らの困難も示さないであろう、



と。

さて今、ともかく一度人々の判断を知った後、ここに再び私は神と人間の精神とに関する問題を論究し、そして同時に全第一哲学の基礎を取扱おうと思う。しかしその際私は何ら大衆の称賛を、また何ら読者の多いことを期待しないであ

ろう。私はただ本気で私と共に思索し、精神をもろもろの感覚から、また同時にすべての先入見から引離すことができ、また引き離すことを欲する人々だけに読まれるように、これを書いたのであつて、かような人がまったくわずかしか見出されないことを私は十分に知つてい

る。しかるに私の根拠の連結と聯関とを  
理解することに意を用いないで、多くの  
人々にとって慣わしであるように、ただ  
箇々の語句に拘泥して、お喋りをするこ  
とに熱心な人々についていえば、彼等は  
この書物を読むことから大きな利益を  
収めないであろう。そしてたとい彼等が

おそらく多くの箇所において嘲笑する機会を発見するにしても、何か緊要なあるいは答弁に値する駁論は容易になし得ないであろう。

しかしまた他の人々に対しても、私がすべての点において初手から彼等を満足させるであろうと私は約束しないの

であるからして、また僭越にも私が何人かに困難と思われるであらう一切のことがらを予見し得ると私は確信しないのであるからして、私はまずこれらの省察において、私がそれによつて真理の確実な明証的な認識に到達したと思われるところの同一の思惟の作用を開陳し、

もつて私が説得せられたのと同じ根拠によつておそらく私は他の人々をも説得し得るかどうかを知りたいと思う。そして、かくして後、これらの省察を印刷に附せられる前に検討してもらつたために送つた幾人かの智能と学識とによつてすぐれた人々の駁論に対して答える

であろう。というのは、この人々によつてなされた駁論は十分に数多くまた種々様々であるので、そこにすでに触れられていない、少くとも或る重要な、他の駁論が容易に何人の心にも浮かばないであろう、と私は敢えて期待するのである。そしてかるがゆえに、私は読者に、

右のすべての駁論及びこれに対する弁明を通読する労力をとられない以前に、この省察について判断を下されないように、繰り返しお願いする。

〔#改訂〕

以下の六省察の概要



第一省察においては、いかなるわけでも我々はすべてのもの、とりわけ物質的なものについて、少くとも我々がこれまで有したものよりほかの、もろもろの学問の基礎を有しない間は、疑うことができぬかの理由が示される。かような全般的

な懷疑の効用は初手には明かではない  
とはいえ、しかしそれはあらゆる先入見  
から我々を解放し、精神を感覚から引き  
離すに最も容易な道を用意し、そして最  
後に、我々がかくして後に真であると理  
解したことについてもはや疑い得ない  
ようにするといふ点において、その効用

は極めて大きいのである。

第二省察においては、自己の有する自由を使用する精神は、その存在について極めて少しでも疑い得る一切は存在しないと仮定するが、自身はしかし存在せざるを得ないことに気づくのである。そのことはまた、このようにして、自己に、

すなわち思惟する本性に属するものと、  
身体に属するものとを容易に區別する  
からして、極めて大きな効用を有してい  
る。しかしおそらく或る者は、その箇所  
において靈魂の不死についての根拠を  
期待するであらうから、ここで彼等に告  
げておかねばならぬと思う、私は厳密に

論証しない何物も書かないことに努めたので、幾何学者たちの間で慣用せられている順序、すなわち何かを結論する前に、求められた命題が依繁する一切を前もって提論するといふ順序よりほかの順序に従うことができなかつた、と。しかるに靈魂の不死をよく認識するため

に前もって要求せられる第一の何より重要なことがらは、靈魂についてできるだけ分명한、そして身体のあらゆる概念からまったく區別せられた概念を作るということである。これはそこでなされている。しかしそのほかに、我々が明晰に判明に理解する一切は、我々がそれを

理解する通りに、真であるということを知ることがまた要求せられるのである。

これは第四省察以前には証明せられることができなかつた。さらに、物体的本性の判明な概念を有しなければならないのであつて、かかる概念は一部分この第二省察において、また一部分は第五及

び第六省察において作られている。なおまたこれら一切のことから、精神と身体とがまさにそのように把握せられるごとく、別個の実体として明晰に判明に把握せられるものは、全く実在的に互に區別せられた実体であることが結論せられねばならないのである。そしてこれは



第六省察においてその通り結論せられて  
いる。これはしかも、同じ第六省察に  
おいて、我々はいかなる物体も可分的と  
してでなければ理解せず、反対にいかな  
る精神も不可分的としてでなければ理  
解しないということによって、確かめら  
れている。すなわち我々はどのように小

さい物体でもその半分を考えることは  
できるが、いかなる精神についてもその  
半分を考えることはできぬ。かようにし  
て両者の本性は単に別であるのみでな  
く、また或る点で相反することが認めら  
れる。しかしながらこのことについては  
この書物の中ではそれ以上立ち入って

論じなかつた。というのは、一方それだけで、身体の消滅から精神の死が帰結しないことを示し、そしてかようにして人間に来世の生の希望を与えるには、十分であるからであり、他方またこの精神の不死を結論し得るもろもろの前提はあらゆる自然学からの説明に依繁してい

るからである。すなわちまず、およそあらゆるゆる実体、詳しく言うると、存在するた  
めには神によって創造せられねばなら  
ぬものは、自己の本性上不滅であり、そ  
の同じ神によつて、そのものに神の協力  
が拒まれることによつて、無に帰せしめ  
られるのでなければ、決してあることを

やめ得ないということが知られねばならぬ。そして次に、一般的に見られた物体は実体であり、それがために決してまた滅びないということ、しかし人間「#

「人間」は底本では「人間」の身体は、余の物体と異なる限り、ただ単にもろもろの器官の或る一定の布置、及びこの種

の他の偶有性から組立てられたものであり、しかるに人間の精神はかように何らかの偶有性から成るのではなく、純粋な実体であるということ、に着目せられねばならぬ。というのは、たといその一切の偶有性が変化せられ、その結果、別々のものを思惟し、別のものを意欲し、別の

のものを感覚し、など、するにしても、

そのために同じ精神が別のものにならないが、人間の身体はしかし、ただ単にその何らかの部分の形体が変化せられることによつて、別のものになる。そのことから身体はきわめて容易に滅亡し、精神はしかし自己の本性上不死である

ということが帰結せられるのである。

第三省察においては、神の存在を証明するための私の主要な論証を、私の見るところでは、十分に詳しく展開した。しかしながら、読者の心をできるだけ感覚から引き離すために、私はかしこでは物體的なものから藉りてこられた比較を



用いることを欲しなかつたからして、たぶん多くの不明な点が残つていゝるであらう。しかしそれは、私の希望するところでは、後に駁論に対する答弁の中でまったく除き去られるであらう。中にも、

例えは、いかにして、我々のうちにあるこの上なく完全な実有の観念は、この上

なく完全な原因によらなくては存し得ないほど大きな客観的実在性を有するかということであるが、これは答弁において、その観念が或る工人の精神のうちにある極めて完全な機械との比較によって解説せられている。すなわち、この観念の客観的製作は或る原因、言うまで

もなくこの工人の知識、あるいは彼にそれを授けた或る他の者の知識、を有しななければならぬのと同様に、我々のうちにある神の観念は神自身を原因として有せざるを得ないのである。

第四省察においては、我々が明晰に判明に知覚する一切は真であるというこ

とが証明せられる。同時にまた虚偽の根拠が何に存するかが説明せられる。これは前に述べたことがらを確かにするためにも、後にくことがらを理解するためにも、必ず知ることを要するのである。

（しかしながら注意しておかねばらぬ、かしこで私は決して罪、すなわち善悪の

追求において犯される誤謬についてではなく、ただ真偽の判別において起る誤謬について論じたのである、と。また私は信仰、あるいは処世に属することがらではなく、ただ思弁的な、そしてもっぱら自然的な光によって認識せられた真理を検討したのである、と。）

第五省察においては、一般的に見られた物体的本性が説明せられるほか、また新しい根拠によつて神の存在が論証せられる。しかしこの根拠にもおそらく或る困難が生ずるであろうが、これは後に駁論に対する答弁の中で解決せられるであろう。そして最後に、幾何学的論証

の確實性さえも神の認識に依繁するといふことの、いかにして真であるかが示される。

最後に、第六省察においては、悟性が想像力から分たれる。その区別の徴表が記述せられる。精神が実在的に身体から区別せられることが証明せられる。にも

かかわらず精神が身体に、これと或る統一を成すほど密接に結合せられていることが示される。感覺から起るのを慣わしとするすべての誤謬が調査せられる。これを避け得る手段が開陳せられる。そして最後に、物質的なものの存在を結論し得る一切の根拠が提示せられる。それ



は、この根拠がまさに証明することがら、すなわち、世界は実際にあるということ、また人間は身体を有するということ、その他この類のことがらを証明するため、この根拠が極めて有益であると考え、この根拠が極めて有益であると考え、かかることがらについては健全な精神を有する何人も決して

本気に疑わなかつたのである。そうでは  
なくて、この根拠を考察することによつ  
て、これがかの我々を我々の精神及び神  
の認識に達せしめる根拠ほど堅固でも  
分明でもないことが認められるゆえで  
ある。従つてかの根拠は人間の智能によ  
つて知られ得る一切のうち最も確實で

最も明証的である。ただこの一事を証明  
することを私はこの省察において目的  
としたのである。かるがゆえに私はその  
中でまたたまたま取扱われた他の種々  
の問題をここで枚挙しないことにする。

〔#改丁〕

## 省察一

疑いをいれ得るものについて。

すでに数年前、私は気づいた、いかに多くの偽なるものを私は、若い頃、真なるものとして認めただか、またそれを基と

してその後私がその上に建てたあらゆるものがいかに疑わしいものであるか、またさればいつか私がもろもろの学問において或る確固不易なるものを確立しようとするならば、一生一度は断じてすべてを根柢から覆えし、そして最初の土台から新たに始めなくてはならぬ

い、と。しかしこれはたいへんな仕事であると思われたので、私は十分に成熟してこの業に着手するにそれ以上適当な  
いかなる時も後に来ないという年齢に  
達するまで待った。かようなわけで長い  
間延ばしてきたので、いまやもし私が実  
行するために残っている時間をなおも

思案に空費するならば、私は過ちを犯す  
ことになるであろう。そこで、幸に今日、  
私の心は一切の憂いから放たれ、独り離  
れて、平穩な閑暇を得たから、いよいよ  
私は本気にかつ自由に私のもろもろの  
意見のこの全般的顛覆に従事しよう。

ところがこれがためには、その意見の

すべてが偽なるを示す必要はないであろう、かかることはおそらく私の到底為し遂げ得ないことである。かえつて、すでに理性は、まったく確實でもなく疑い得ぬものでもないものに対しては、明白に偽なるものに対するに劣らず注意して、同意を差し控うべきだと私を説得す



るのであるから、もし私がその意見のい  
ずれのうちになりとも何か疑いの理由  
を見出すならば、それでそのすべてを拒  
斥するに十分であろう。またこれがため  
にその意見の一つ一つを調べ※「#」互  
十回」、第4水準2-12-11」ることを要し  
ないであろう、かかることは際限のない

仕事である。かえつて、土台を掘りかえせばその上に建てられたものはいずれもおのずと一緒に崩れるのであるから、私はかつて私が信じたところの一切が拗っていた原理そのものに直ちに肉薄しよう。

実にこれまで私が何よりも真と認め

たものはいずれも、感覚からか、または  
感覚を介してか、受取つたのであつた。  
しかるにこの感覚は時として欺くとい  
うことがわかつた。そして一度たりとも  
我々を瞞したものには決してすつかり  
信頼しないのが賢明なことである。

しかしおそろく、感覚はあまり小さい

もの、あまり遠く離れたものに関して  
時として我々を欺くとはいえ、同じく感  
覚から汲まれたものであつても、まった  
く疑い得ぬ他の多くのもがある。例え  
ば、今私がここに居ること、煖炉のそば  
に坐っていること、冬の服を着ているこ  
と、この紙片を手にしてしていること、その

他これに類することの「とき」。まことにこの手やこの身体が私のものであるということとは、いかにして否定され得るであらうか、もし私がおそらく私を誰か狂った者に、その脳が黒い胆汁からの頑固な蒸気でかき乱されていて、極貧であるのに自分は帝王であるとか、赤裸である

のに緋衣を纏うているとか、粘土製の頭を持つているとか、自分は全体が南瓜であるとか、硝子から出来ているとか、と、執拗に言い張る者に、比較するのでもなければ。しかし彼等は狂人であるのだが、もし私が何か彼等の例を私に移すならば、私自身また彼らに劣らぬ精神錯乱と

見られるであろう。

いかにもその通りだ。だが私は、夜には眠るのをつねとし、そして夢において、その同じすべてのことを、いな時として彼等狂人が覚めているときに経験するよりもっと真らしくないことをさえ経験する人間でないとでもいうのか。実際、

いかにしばしば私は、夜の夢のなかで、かの慣わしとすること、すなわち、私がここに居ること、服を着ていること、煖炉のそばに坐つていることを、信じているか、しかも私は着物を脱いで寢床の中に横たわっているのに。とはいえ現在私は確かに覚めたる眼をもつてこの紙片



を視ている、私が動かすこの頭は眠つてはいない、私はあらかじめ考えて、意図を持ってこの手を伸ばしかつ感覺している。眠つている場合に生ずることはこのように判明なものではないであろう。それにしても私は他の時には夢のなかでまた同様の意識によつて騙されたこ

とを思い出さないとしてもいいのか。かか  
ることをさらに注意深く考えるとき、私  
は覚醒と夢とが決して確実な標識によ  
って区別され得ないことを明かに認め  
て、驚愕し、そしてこの驚愕そのものは、  
私は現に夢見ているのだとの意見を私  
にほとんど説得するのである。

それゆえにいま、我々は夢みているもの  
としよう。そしてこの特殊的なもの、  
すなわち、我々が眼を開くこと、頭を動  
かすこと、手を伸ばすこと、が真でなく、  
いな、またおそらく我々はかような手も、  
またかような身体全体も有するのでは  
ないとしよう。それにしても実際我々は、

睡眠の間に見られたものが、あたかもかの現実にあるものに象《かたど》ってでなければ作られ得ぬところの絵に画かれた像のごときものであること、従つて少くともこの一般的なもの、すなわち、眼、頭、手、また全部の身体は、或る空想的なものではなくて真なるものとし

て存在することを、承認しなければならぬ。というのは、実に彼等画家は、セイレネスやサチユロイを極めて怪奇な形で描こうと努力する場合でさえ、それにあらゆる点で新しい本質を付与することとは出来ないのであつて、単に種々の動物のもろもろの部分を混ぜ合わせるに

過ぎないから。それとも、もし彼等がおそらく、およそ類似のある何物も見たとがない、従つてまったく虚構であり虚妄であるというほど新しいものを案出するとしても確かに少くとも彼等がそれを構成する色は真なるものでなければならぬのである。そして同じ理由に

よつて、たとひまたこの一般的なもの、すなわち、眼、頭、手、その他これに類するものが空想的なものであり得るとしても、少くとも或る他のなおいつそう単純な、かつ普遍的なものは、すなわち、それでもつてあたかも真なる色でもつてのごとく、この、真にせよ偽にせよ、

我々の思惟のうちにある物の一切の像が作られるところのものは、真なるものであることは、必然的に承認しなければならぬ。

この類に属すると思われるものは、物体的本性一般、及びその延長、さらに延長あるものの形体、さらにその量、すな



わちその大いさと数、さらにそれがそのうちに存在する場所、及びそのあいだに連続する時間、その他これに類するものである。

かるがゆえにこのことから我々はたぶん正当に、物理学、星学、医学、その他すべて複合せられたものの考察に関

わかる学問はたしかに疑わしいということ  
と、これに反して算術、幾何学、その他  
かようなもの、すなわち極めて単純でい  
たつて一般的なもののみを取扱い、そし  
てそれが世界のうちに存するか否かを  
ほとんど顧みない学問は、或る確實で疑  
いを容れぬものを含むということ、を結

論し得るであらう。なぜなら、私が覚めて  
いるにせよ、眠っているにせよ、二と  
三を加えれば五であり、また四角形は四  
より多くの辺を有しないのであり、そし  
てかように分명한真理が虚偽の嫌疑を  
かけられることは起り得ないと思われ  
るからである。

さりながら私の心には或る古い意見、

すなわちすべてのことを為し能う神が  
存在し、そして私はこの神によつて現に  
私が有るごとき性質のものとして創造  
せられたという意見が刻みつけられて  
いる。さすればしかし、この神が、何ら  
の地も、何らの天も、何らの延長あるも

のも、何らの形体も、何らの大きさも、何らの場所も、まったく存在せず、しかもこのすべてのものが現在とたがわず私には存在するごとく思われるように、為さなかつたということ、私はどこから知るのであるか。否、むしろ、私はときどき他の人々が自分では極めて

完全に知っていると思っていることに  
関して間違いをしていると判断するの  
であるが、これと同じように、私が二と  
三とを加えるたびごとに、あるいは四角  
形の辺を数えるたびごとに、あるいはも  
し何か他のさらに容易なことを想像し  
得るならそのことについて判断するた

びごとくに、私が過つように、神は為した、

とさえ言うことができるであらうか。し

かしおそらく神はかように私が欺かれ  
ることを欲しなかつたであらう、なぜな

ら神はこの上なく善であると言われて  
いるから。しかるにもしこのこと、すな

わち私を常に過つようなものとして創

造したということが神の善意に反する  
とするならば、私がときどき過つことを  
許すということも神の善意と相容れな  
いように思われる、けれどもこの最後の  
ことはそうは言い得ないのである。

もちろん、余のすべてのものが不確実  
であると信ずるよりか、むしろそのよう



に有力な神を否定することを選ぶ者が  
たぶんあるであらう。しかし我々はいま  
は彼等に反対せずにおこらう。そして神に  
ついてここで言われた全部が虚構であ  
るとしておこらう。さりながら、彼等がど  
のような仕方、運命によるにせよ、偶  
然によるにせよ、物の連続的な聯結によ

るにせよ、あるいは何か他の仕方によるにせよ、私が私の現に有るものに成るに至つたと仮定するにしても、過つこと思ひ違ひすることは或る不完全性であると思われるからして、彼等が私の起原の創造者をより無力であると考えれば考えるほど、私が常に過つほど不完全であ

るといふことは、ますます確からしくなるであろう。この議論に対して私はまこと何ら答うべきものを有しない。しかし私は、かつて私が真と思つたもののように疑うことを許さぬものは何もないこと、しかもこれは無思慮とか軽率とかによるのではなく、強力な熟慮せられた

理由によるのであること、従つてもし私  
が何か確實なものを見出そうと欲する  
ならば、この議論に対しても、明白に偽  
のものに対してと劣らず用心して、今後  
は同意を差し控えねばならないこと、を  
告白せざるを得ないのである。

しかしながら、これらのことに気づい

ただけでは未だ十分ではない、いつも念頭におくように心を用いなければならぬ。というのは、習いとなつた意見は絶えず還つてきて、いわば長い間の慣わしと親しさの権利とによつて己れに愛着している私の信じ易い心を、ほとんど私の意に反してさえも、占領するからであ

る。また私がこの意見を、それが実際さ  
うであるような性質のもの、すなわち、  
すでに示されたごとく、なるほど多少疑  
わしいが、にもかかわらずはなはだ確か  
らしいもの、従つてそれを否定するより  
も信ずることが遙かに多く道理に適つ  
ているもの、であると思ふ間は、私は

決してそれに同意しそれを信用する習慣を脱しないであろう。かるがゆえに、私が意志をまったく反対の方向に転じて、自分を欺き、そしてしばらくの間すべての意見が偽で空想的であると仮想し、かくして遂に、いわば偏見の重量を双方ともに同等のものとし、もはや曲つ

た習慣が私の判断をものの正しい知覚から逸らせないようにしても、私は不都合なことはしてはいまいと思う。実際、かくすることから何らの危険も誤謬もその間に生じてこないであろうということ、また現在私は実行に関することがらではなくただ認識に関することがら



に専心従事しているのであるから、いかに不信を逞うしても、それが過ぎること  
はあり得ないということ、を私は知つて  
いるのである。

そこで私は真理の源泉たる最善の神  
ではなく、或る悪意のある、同時にこの  
上なく有力で老獪な霊が、私を欺くこと

に自己の全力を傾けたと仮定しよう。そして天、空気、地、色、形体、音、その他一切の外物は、この霊が私の信じ易い心に罨をかけた夢の幻影にほかならないと考えよう。また私自身は手も、眼も、肉も、血も、何らの感官も有しないもので、ただ間違つて私はこのすべてを有す

ると思つてゐるものと見よう。私は堅くこの省察に執着して踏み留まらう。そしてかようにして、もし何か真なるものを認識することが私の力に及ばないにしても、確かに次のことは私の力のうちにある。すなわち私は断乎として、偽なるものに同意しないように、またいかに有

力で、いかに老獪であろうとも、この欺瞞者が何も私に押しつけ得ないように、用心するであらう。しかしながらこれは骨の折れる企てである、そして或る怠慢が私を平素の生活の仕方に返えらせる。そのさまは、おそらく夢の中で空想的な自由を味わっていた囚われびとが、後に

なつて自分は眠っているのではないかと疑い始める場合、喚び醒まされるのを恐れこの快い幻想と共にゆつくり眠りつづけるのと異ならないのであつて、そのように私はおのずと再び古い意見のうちには落ち込み、そしてこの睡眠の平穩に苦勞の多い覚醒がつづき、しかも光の

中においてではなく、かえって既に提出せられたもろもろの困難の解けない闇のあいだで、将来、時を過ぎさねばならぬことのないように、覚めることを怖れるのである。

「#改訂」

## 省察二

人間の精神の本性について。精神は  
身体よりも容易に知られるということ。

昨日の省察によつて私は懷疑のうち  
に投げ込まれた。それは私のもはや忘れ

得ないほど大きなものであり、しかも私  
はそれがいかなる仕方でも解決すべきも  
のであるかを知らないのである。かえつ  
て、あたかも渦巻く深淵の中へ不意に落  
ち込んだように、私は狼狽して、足を底  
に着けることもできなければ、泳いで水  
面へ脱出することもできないというさ



まであつた。しかしなおも私は努力し、昨日進んだと同じ道を、もちろん、極めてわずかであれ疑いを容れるものはすべて、あたかもそれが全く偽であることを私がはつきり知っているのと同じように、払い除けつつ、改めて辿ろう。そして何か確実なものに、あるいは、余の

ことが何もできねば、少くともまさにこのこと、すなわち、確実なものは何もないということを確認なこととして認識するに至るまで、さらに先へ歩み続けよう。アルキメデスは、全地球をその場所から移動させるために、一つの確固不動の点のほか何も求めなかった。もし私が

極めてわずかなものであれ何か確実に揺るがし得ないものを見出すならば、私はまた大きなものを希望することができるのである。

そこで私は、私が見るすべてのものは偽であると仮定する。また、私はひとを欺く記憶が表現するものはいかなるも

のにせよかつて存在しなかつたと信じることにする。私はまったく何らの感官も有しないとす。物体、形体、延長、運動及び場所は幻想であるとする。しかば真であるのは何であろうか。たぶんこの一つのこと、すなわち、確実なものは何もないということであろう。

しかしながらどこから私は、いましがた数え上げたすべてのものとは別で、少しの疑うべき余地もない或るものが存しないことを、知っているのであるか。何か神というもの、あるいはそれをどのような名前で呼ぶにせよ、何か、まさにこのような思想を私に注ぎ込むものが

存するのではあるまいか。しかし何故に私はこのようなことを考えるのであるか、たぶん私自身がかの思想の作者であり得るのであるのに。それゆえに少くとも私は或るものであるのではあるまいか。しかしながら既に私は、私が何らかの感官、または何らかの身体を有するこ

とを否定したのであった。とはいえ私は立ち止まらされる、というのは、このことから何が帰結するのであるか。いったい私は身体や感官に、これなしには存し得ないほど、結いつけられているのであろうか。しかしながら私は、世界のうちに全く何物も、何らの天も、何らの地も、

何らの精神も、何らの身体も、存しないと私を説得したのであつた。従つてまた私は存しないと説得したのではなからうか。否、実に、私が或ることについて私を説得したのならば、確かに私は存したのである。しかしながら何か知らぬが或る、計画的に私をつねに欺く、この上



なく有力な、この上なく老獪な欺瞞者が  
存している。しからば、彼が私を欺くの  
ならば、疑いなく私はまた存するのであ  
る。そして、できる限り多く彼は私を欺  
くがよい、しかし、私は或るものである  
と私の考えるであろう間は、彼は決して  
私が何ものでもないようにすることは

できないであろう。かようにして、一切の  
のことを十分に考量した結果、最後にこの  
命題、すなわち、私は有る「#」「私は  
有る」に傍点」、私は存在する「#」「私  
は存在する」に傍点」、という命題は、  
私がこれを言表するたびごとに、あるい  
はこれを精神によつて把握するたびご

とに、必然的に真である、として立てられねばならぬ。

しかし、いま必然的に有る私、その私  
がいったい何であるかは、私は未だ十分に  
理解しないのである。そこで次に、お  
そらく何か他のものを不用意に私と思  
い違いしないように、かくてまたこのす

べてのうち最も確実に最も明証的であると私の主張する認識においてさえ踏み迷うことがないように、注意しなければならぬ。かるがゆえにいま、この思索に入った以前、かつて私はいったい何ものであると私が信じたのか、改めて省察しよう。このものから次に何であれ右

に示した根拠によつて極めてわずかなりとも薄弱にせられ得るものは引き去り、かくて遂にまさしく確實で揺がし得ないもののみが残るようになしよ。

そこで以前、私はいったい何であると考へたのか。言うまでもなく、人間と考へたのであつた。しかしながら人間とは

何か。理性的動物と私は言うでもあろうか。否。何故というに、さすれば後に、動物とはいったい何か、また理性的とは何か、と問わねばならないであろうし、そしてかようにして私は一個の問題から多数の、しかもいつそう困難な問題へ落ち込むであろうから。またいま私はこ

のような煩瑣な問題で空費しようとするほど多くの閑暇を有しないのである。むしろ私はここで、私は何であるかと私が考察したたびごとに、何が以前私の思想に、おのずと、私の本性に導かれて、現われたか、に注意しよう。そこに現われたのは、もちろん、まず第一に、

私が顔、手、腕、そしてこのもろもろの部分の全体の機械を有するということであつて、かようなものは死骸においても認められ、そしてこれを私は身体と名づけたのである。なおまた、そこに現われたのは、私が栄養をとり、歩行し、感  
覚し、思惟するということであつて、こ



これらの活動を私は靈魂に關係づけたのである。しかしながらこの靈魂が何であるかに、私は注意を向けなかつたか、それともこれを風とか火とか空気とかに似た、私のいつそう粗大な部分に注ぎ込まれた、何か知らぬが或る微細なものと想像した。物体については私は決して疑

わず、判明にその本性を知っていると思  
っていた。これをもしおそらく、私が精  
神によつて把握したごとくに、記述する  
ことを試みたならば、私は次のように説  
明したのである。曰く、物体とはすべて、  
何らかの形体によつて限られ、場所によ  
つて囲まれ、他のあらゆる物体を排する

ごとくに空間を充たすところの性質を有するもの、すべて、触覚、視覚、聴覚、味覚、あるいは嗅覚によつて知覚せられ、そして実に多くの仕方、決して自己自身によつてではなく、他のものによつて、そのどこかに触れられて、動かされるところの性質を有するものである、と。す

なわち、自己自身を動かす力、同じように、感覺する、あるいは思惟する力を有することは、決して物体の本性に属しないといふは判断したのであり、のみならずかような能力が或る物体のうちに見出されることに私はむしろ驚いたのである。

しかし現在、或る極めて有力な、そして、もしそういうことが許されるならば、悪意のある、欺瞞者が、あらゆる点において、できる限り、私を欺くことに、骨を折っていると仮定する場合、どうであろうか。私は、物体の本性に属するとさきほど言ったすべてのものうち極めて

わずかなものであれ私が有することを  
確認し得るものがあるろうか。私は注意し、  
考え、また考える。私が有すると言ひ得  
るものには何も出会わない。私は同じこ  
とを空しく繰り返すことに疲れる。しか  
らば靈魂に属するとしたものは、どうで  
あろうか。栄養をとるとか歩行するとか

いうことは？　実にいま私は身体を有

しないのであるから、これもまた作りごと以外の何もものでもない。感覺すること  
は？　もちろんこれも身体がなければ  
存しないものであり、また私は夢において、後になつて実際に感覺したのではないと気づいた非常に多くのことを感覺

すると思つたのである。思惟すること  
は？ここに私は発見する、思惟がそれ  
だ、と。これのみは私から切り離し得な  
いのである。私は有る、私は存在する、  
これは確實だ。しかしいかなる間か。も  
ちろん、私が思惟する間である。なぜと  
いうに、もし私が一切の思惟をやめるな



らば、私は直ちに有ることを全くやめる  
ということがおそらくまた生じ得るで  
あろうから。いま私は必然的に真である  
もののほか何も許容しない、そこで私は  
まさしくただ思惟するもの、言い換えれ  
ば、精神、すなわち靈魂、すなわち悟性、  
すなわち理性である、これらは私には以

前その意味が知られていなかっただ言葉である。しかし私は真のもの、そして真に存在するものである。だがいかなるものなのか。私は言った、思惟するものと。

そのほかに何か。想像を働かせてみよう。私は人体と称せられるかのもろもろ

の部分の集合ではない。私はまたこれらの部分に注ぎ込まれた或る微妙な空気でもなく、風でも、火でも、蒸気でも、氣息でも、その他私の構像するような何ものでもない。というのは、このようなものは無であると私は仮定したのであるから。けれどそれにもかかわらず、私

は或るものである、という立言は動かないのである。しかし、たぶん、私に知られていないとのゆえをもつて、無であると仮定するこれらのものそのものが、ものの真理においては私が知っている私、その私と別のものでないということが生じないであろうか。これについて私は

何も知らない。このことについては私はいま争わない。ただ私に知られていることについてののみ、私は判断を下し得るのである。私は私が存在することを知っている。そして、私の知っている私、その私は何であるか、と問うている。この、かように厳密な意味における知識が、そ

の存在を私が未だ知っていないものに依繋しないということ、従って私が想像力によって構像する何ものにも依繋しないということとは、極めて確かである。

そしてこの構像する「#」構像する」に「傍点」という語が私の誤謬を私に告げるのである。なぜなら、もし私が何かであ

ると私が想像したならば、私は実際に構  
像するであろうから。というのは、想像  
するとは物的なものゝの形体、あるいは  
像を見ることにほかならないのである  
から。しかるに既に私は、私は有るとい  
うこと、同時にまた一切このよゝうな像、  
そして一般に物体の本性に關係づけら

れるあらゆるものは、夢幻以外の何ものでもないことがあり得るということ、を確かに知っている。このことに気づいた場合、私はいったい何であるかをさらに判明に知るために想像力を働かそうと言うのは、いまたしかに私は目覚めており、そして真なるものをいくらか見るが、



しかし未だ十分に明証的に見ないからして、夢がこのものをさらに真にさらに明証的に表現するように、努力して眠りに入ろうと言うのに劣らず、道理に反すると思われるのである。かようにして私は、想像力の助けを藉りて捉え得るいかなるものも、この、私が私について有す

る知識に属しないこと、精神が自己の本性をまったく判明に知覚するためには、極力注意して精神をそのようなものから遠ざけねばならぬこと、を認識するのである。

しからば私は何であるか。思惟するもの、である。これは何をいうのか。言う

までもなく、疑い、理解し、肯定し、否定し、欲し、欲せぬ、なおまた想像し、感覚するものである。

まことにこれは、もし全部が私に属するならば、僅少ではない、しかしなぜ属してはならないであろうか。いまほとんど一切のものについて疑い、しかしいく

らかのものは理解し、この一つのごとは  
真であると肯定し、余のことを否定し、  
いつそう多くのことを知ろうと欲求し、  
欺かれることを欲せず、多くのことを意  
に反してであれ想像し、なおまたいわば  
感覚からきた多くのものを認めるもの  
は、私そのものではないのか。たとい私

がつねに眠るにしても、たとひまた私を創造したものが、できる限り、私を欺くにしても、私は有るといふことと同等に真でないものは、これらのうち何であるか。私の思惟から区別せられるものは、何であるか。私自身から分離せられていると言われ得るものは、何であるか。と

いうのは、疑い、理解し、欲するものが私であることは、これをさらに明証的に説明する何物も現われなほほど、明白である。しかし実にまた私は想像する私と同じ私である。なぜなら、たといおそらく、私が仮定したように、想像せられたものがまったく何一つ真でないにして

も、想像する力そのものは実際に存在し、  
そして私の思惟の部分をなしているか  
らである。最後に、私は、感覺する、す  
なわち物體的なものをいわば感覺を介  
して認める私と同じ私である。いま私は  
明かに、光を見、噪音を聴き、熱を感じ  
る。これらは偽である、私は眠っている

のだから、といわれるでもあろう。しかし私は見、聴き、暖くなると私には思われるということとは確實である。これは偽であり得ない。これが本来、私において感覚すると称せられることなのである。そしてこれは、かように厳密な意味において、思惟すること以外の何物でもない



のである。

これらのことによつてともかく私は、  
私はいつたい何であるかを、いくらかよ  
く知り始める。しかしながらこれまでの  
ところ、その像が思惟によつて形作られ、  
そして感覺そのものが検証する物的  
なもの、この何か知らぬが、想像力の

支配下に入り来らぬ、私に属するものよりも、遥かに判明に認知せられると私には思われ、また私はそう考えざるを得ないのである。とはいえ、実際、疑わしくて、知られていないで、私に関係がないと私の認めるものが、真であるもの、認識せられているもの、要するに私自身よ

りも、いつそう判明に、私によつて理解せられるということは、奇異なことであろう。しかし私はこれがどういうことであるかを看取する、すなわち、私の精神はさ迷い歩くことを好み、そして未だ真理の限界内に引き留められることを甘受しないのである。それならそれで宜し

い。我々はさらにひとたびこの精神に手  
綱を極度に弛めてやり、かくして、やが  
て適当な時に再び引き締める場合、それ  
がいつそう容易に統御せられ得るよう  
にしよう。

そこで我々はかの普通にすべてのも  
ののうち最も判明に理解せられると思

われているもの、すなわち、言うまでもなく、我々が触れ、我々が見る物体を考察しよう。しかし物体一般ではない。と  
いうのは、この一般的な知覚はむしろい  
つそう不分明であるのがつねであるか  
ら。かえって我々は特殊的な一つのもの  
を考察する。我々は、例えば、この蜜蝋

をとろう。それは今しがた蜜蜂の巣から取り出されたばかりで、未だ自己の有する蜜のあらゆる味を失わず、それが集められた花の香りのいくらかを保っている。その色、形体、大きさは明白である。すなわち、それは堅くて冷たく、容易に掴まれ、そして指で打てば音を発する。

要するに或る物体をできるだけ判明に認識し得るために要求せられ得ると思われる。この蜜蝋に具わっている。しかしながら、見よ、私がこう言っている間に、それを火に近づけると、残っていた味は除き去られ、香は散り失せ、色は移り変わり、形体は毀され、大きさは

増し、流動的となり、熱くなり、ほとんど  
ど掴まれることができず、またいまは、  
打つても音を発しない。それでもなお同  
じ蜜蝋は存続しているのか。存続してい  
ると告白しなければならぬ。誰もこれを  
否定しない。誰もこれと違って考えない。  
しからばこの蜜蝋においてあのように



判明に理解せられたものは、何であつたのか。それは確かに私が感官によつて捉えたところのいかなるものでもない。なぜなら味覚、あるいは嗅覚、あるいは視覚、あるいは触覚、あるいは聴覚によつて感知したあらゆるものは、いまは変化しているからである。しかもなお蜜蝋は

存続している。

たぶんそれは私が現在思惟するものであつたのであろう、すなわち、疑いもなく、蜜蝋そのものは、かの蜜の甘さでも、花の香りでも、かの白さでも、形体でも、音でも、あつたのではなく、かえつて少し前にはかの仕方で分明なもの

として私に現われ、現在は別の仕方で見られるところの物体であつたのである。しかしかように私が想像するこのものは、厳密に言えば、何であるか。我々は注意しよう、そして、蜜蝋に属しないものを遠ざけることによつて、何が残るかを見よう。疑いもなく、延長を有する、

屈曲し易い、変化し易い或るもの以外は  
何も残らない。しからばこの屈曲し易い、  
変化し易いとは、どういうことであるか。  
それは、この蜜蠟が円い形体から四角な  
形体に、あるいはこの四角な形体から三  
角の形体に転じられ得ると私が想像す  
ることであろうか。決してそうではない。

なぜなら、私は蜜蝋がこの種の無数の変化を受け得ることを理解するが、しかし私はこの無数のものを、想像することによつてはことごとく辿り得ず、従つてこの理解は想像する能力によつては仕遂げられないからである。さらに延長を有するとは、どういうことであるか。蜜蝋

の延長そのものもまた知られていない  
のではあるまいか。なぜならそれは、溶  
解しつつある蜜蝋においていつそう大  
きくなり、煮沸せられるときにはさらに  
いつそう大きくなり、そして熱が増され  
るなら従ってまたいつそう大きくなる  
からである。そして蜜蝋が何であるかは、

このものがまた延長において私がかつて想像することによつて把握するよりも多くの多様性を容れると考えるのでなければ、正しく判断せられないであろう。従つて私は、この蜜蝋が何であるかを実に想像するのではなく、ただ単に精神によつて知覚する、ということ認め

るのほかはないのである。私はこの特殊  
的な蜜蠟を言っている、なぜなら蜜蠟一  
般については、そのことはさらに明瞭で  
あるから。しからば精神によつてのほか  
知覚せられないこの蜜蠟は、いったいど  
ういうものであるのか。疑いもなく、私  
が見、私が触れ、私が想像するものと同



じものの、要するに私が始めからこういう  
ものであると思つていたのと同じもの  
である。しかしながら、注意すべきこと  
は、この蜜蝋の知覚は、視覚の作用でも、  
触覚の作用でも、想像の作用でもあるの  
ではなく、また、たとい以前にはかよう  
に思われたにしても、かつてかようなも

のであつたのではなく、かえつてただ単に精神の洞観である、そしてこれは、これを構成しているものに私が向ける注意の多少に依じて、あるいは以前そうであつたように不完全で不分明であることも、あるいは現在そうあるように明晰で判明であることもできるのである。

しかるに一方私はいかに私の精神が誤謬に陥り易いものであるかに驚く。というのは、たとい私がこのことどもを自分において黙って、声を上げないで考察するにしても、私は言葉そのものに執着し、そしてほとんど日常の話し方そのものによつて欺かれるからである。すなわ

ち我々は、蜜蠟がそこにあるならば、

我々は蜜蠟そのものを見る、と言ひ、

我々は色あるいは形体を基として蜜蠟

がそこにあると判断する、と我々は言わ

ないのである。そこから私は直ちに、蜜

蠟はそれゆえに眼の視る作用によつて、

ただ単に精神の洞観によつてではなく、

認識せられると結論するであらう。ところで、もしいま私がたまたま窓から、街道を通っている人間を眺めたならば、私は彼等についても蜜蠟についてと同じく習慣に従って、私は人間そのものを見る、と言う。けれども私は帽子と着物とのほか何を見るのか、その下には自動機

械が隠されていることもあり得るではないか。しかしながら私は、それは人間である、と判断する。そしてかように私は、私が眼で見ると思つたものでも、これをもつぱら私の精神のうちにある判断の能力によつて把握するのである。

しかしながら自己の知識を一般人を

超えて高めようと欲する者は、一般人が  
発明した話の形式から懐疑を探し出し  
たことを恥じるであらう。我々は絶えず  
先へ進もう。いったい私が蜜蠟の何であ  
るかをしつそう完全にいつそう明証的  
に知覚したのは、最初私が蜜蠟を眺め、  
そしてこれを外的感覚そのものによつ

て、あるいは少くとも人々のいわゆる共通感覚によつて、言い換えると想像的な力によつて、認識すると信じた時であるか、それとも実にむしろ現在、すなわち一方蜜蝋が何であるかを、他方いかなる仕方で認識せられるかを、いつそう注意深く探究した後であるか、に注目しよう。



このことについて疑うのは確かに愚かなことであろう。最初の知覚において何が判明であつたか。どんな動物でも有し得ると思われぬものは何であつたのか。しかるにいま私が蜜蝋をその外的形式から区別し、そしていわば着物を脱がせてその赤裸のままを考察する場合、た

とい未だ私の判断のうちに誤謬が存し  
得るにしても、私は実際、人間の精神な  
しには、かように蜜蠟を知覚することは  
できないのである。

しかしこの精神そのものについて、す  
なわち私自身について、私は何と云うべ  
きであろうか。というのは、私は精神の

ほか未だ他の何物も私のうちに存すると認めないのである。しからば、この蜜蠟をかくも判明に知覚すると思われる私、その私について、私は何と云うべきであろうか。私は私自身を単に遥かにいっそう真に、遥かにいっそう確実に認識するのみでなく、また遥かにいっそう判

明にいつそう明証的に認識するのではあるまいか。なぜというに、もし私が蜜蠟を見るということから、蜜蠟が存在すると判断するならば、確かに遙かにいつそう明証的に、私がそれを見るということそのことから、私自身がまた存在するということが、結果するからである。す

なわち、この私の見るものが実は蜜蝋ではないということはある、私は何らかのものを見る眼を決して有しないと  
いうことはあり得る、しかし、私が見るとき、あるいは（いま私はこれを区別しないが）私は見ると私が思惟するとき、  
思惟する私自身が或るものでないとい

うことは、まったくあり得ないのである。同様の理由で、もし私が蜜蝋に触れると、ということから、蜜蝋が有ると判断するならば、同じことがまた、すなわち私は有るということが結果する。もし私が想像するということから、あるいは他のどんな原因からであつても、蜜蝋が有ると判

断するならば、やはり同じことが、すな  
わち私は有るということが結果するの  
である。しかも蜜蠟について私が気づく  
まさにこのことは、私の外に横たわって  
いる余のすべてのものに適用すること  
ができる。そしてさらに、もし蜜蠟の知  
覚が、単に視覚あるいは触覚によつての

みでなく、いつそう多くの原因によつて私に明瞭になつた後、いつそう多く判明なものと思われたならば、今やいかに多くいつそう判明に私自身は私によつて認識せられることか、と言わなければならぬ。というのは、蜜蝋の知覚に、あるいは何か他の物体の知覚に寄与するい



かなる理由も、すべて同時に私の精神の本性をいっそうよく証明するはずであるからである。しかしながらまた精神そのもののうちにはその本性の知識をいっそう判明になし得るものがこれ以上に他に極めて多く存するのであり、かくてこれらの物体から精神の本性に推し及

ぶものは、ほとんど数えるにあたらぬと思われる。

かくて、見よ、遂に私はおのずと私の欲したところに帰って来たのである。すなわち、今や、物体そのものも本来は感覚によつて、あるいは想像する能力によつてではなく、もつぱら悟性によつて知

覺せられるということ、触れられることあるいは見られることによつてではなく、ただ理解せられることによつて知覺せられるということ、が私に知られたのであるから、私は何物も私の精神よりもいつそう容易に、またいつそう明証的に私によつて知覺せられ得ないということ

とを明瞭に認識するのである。しかしながら古い意見の習慣はそんなに速かに除き去られ得ないからして、私の省察の時間の長さによつてこの新しい認識がいつそう深く私の記憶に刻まれるように、ここで立ち停まることが適當であろう。

「#改訂」

### 省察三

神について。神は存在するということ。  
と。

いま私は眼を閉じ、耳をふさぎ、すべ

ての感覚を遠ざけ、物的なものすべ  
ての像をさえ私の思惟から拭い去り、な  
いし、これはほとんどできないことであ  
るから、少くともかかる像を空虚で偽の  
ものとして無視しよう。そしてただ、自  
分に話し掛けることによって、またいつ

そう深く洞観することによつて、私自身を漸次私にいつそう知らされたもの、いつそう親しいものにすることに努めよう。私は思惟するものである、すなわち疑い、肯定し、否定し、わずかなことを理解し、多くのことを知らぬ、欲し、欲せぬ、なおまた想像し、感覺するもので

ある。というのは、先に私の気づいたごとく、たとい私が感覺しあるいは想像するものは私の外においてはおそらくは無であるにしても、感覺及び想像力と私が称するかの思惟の仕方は、それらが単に思惟の或る一定の仕方である限りにおいては、私のうちにある、ということ



は私に確實であるからである。

さてこのわずかな言葉で私は、私が真に知っていること、あるいは少くとも、私が知っているところれまでに私の気づいたこと、の一切を要約した。いま私はおそらくなお私のうちに何か他の未だ私の振り返ってみなかつたものがありは

しないかどうか、さらに注意深く調べてみよう。私が思惟するものであるということは、私に确实である。しからばまた私は或ることが私に确实であるためには何が要求せられるかをも知っているのではあるまいか。疑いもなく、この第一の認識のうちには、私が肯定するところ

ろのもの、の或る一定の明晰で判明な知覚のほか他の何物も存しない。かかる知覚はもちろん、もし私がかように明晰に判明に知覚する何らかのものが偽であることがかつて生じ得るならば、私にもこの真理を確実ならしめるに十分ではないであろう。従つてすでに私は、私が

極めて明晰に極めて判明に知覚するものはすべて真である、ということを一般的な規則として立てることができると思う。

もつとも私は、後になつて疑わしいものであるとわかつた多くのことを、以前にはまったく確實で明白なものとして

認めていた。しからばこれはどういふものであつたか。言うまでもなく、地、天、星、その他私が感覺によつて捉えた一切のものである。しかしそれらのものについて何を私は明晰に知覚したのであるか。言うまでもなく、かかるものの觀念そのもの、すなわち思想が、私の精神に

現われたということである。そして現在といえども、もちろん、かかる観念が私のうちにあることを、私は認めまいとは思わない。しかし或る他のことで、私が肯定し、またこれを信じる習慣によつて明晰に知覚すると考えたことで、しかも実際には私の知覚しなかつたことがあ

った。言うまでもなく、かかる観念がそれから出て、それにまつたく類似している或るものが私の外にあるということである。そしてまさにこの点において私が過っていたか、あるいは私の判断が正しかつたのならば、確かにその判断は私の知覚の力によつて生じたのではなか

つたのである。

しかしそれなら、算術あるいは幾何に  
関すること、何か極めて単純で容易な  
こと、例えば二と三とを加えると五であ  
るということ、あるいはこれに類するこ  
とを私が考察した場合、私は少くともこ  
れを、真であると肯定することができ



よう十分に明瞭に直観したのではあるまいか。実際、私がこれについて疑うべきであるとは後になって判断したのは、おそらく何らかの神が、最も明白なものと思われることに関してさえ欺かれるような本性を、私に付与したかもしれないという考えが私の心に浮かんだからと

いうよりほかの理由によるのではないのである。しかしながら神のこの上ない力についてのこの先入の意見が私に浮んでくるたびごとに、もし神が欲しさえすれば、私が精神の眼で極めて明証的に直観すると思えることにおいてすら、私  
が間違ふようにすることは神にとって

容易である、と告白せざるを得ないのである。とはいえ私は、私が極めて明晰に知覚すると信じるものそのものに私を向けるたびごとに、私はそれによつてまつたく説得せられ、かくておのずと次の言葉を発する、できる者は誰でも私を欺くが宜い、しかし、私が私は或るもので

あると思惟するであらう間は、彼は私が  
無であるようにすることは決してでき  
ないであらう、あるいは、私は有るとい  
うことが現在真であるからには、私がか  
つて有らなかつたといふことがいつか  
真であるようにすることは決してでき  
ないであらう、あるいはおそらくまた、

二と三とを加えると五よりも大きいな  
いし小さいとか、あるいはこれに類する  
こと、すなわちたしかにそのうちに明白  
な矛盾を私の認めること、が生ずるよう  
にすることはできないであろう、と。そ  
して確かに私は何らかの神が欺瞞者で  
あると見做すべきいかなる機会も有し

ないのであり、また実に何らかの神が存するかどうかを未だ十分に知らないものであるからして、単にこのような意見に依繋する疑いの理由は極めて薄弱であり、そしていわば形而上学的である。しかしかかかる理由もまた除き去られるように、機会が生ずるや否や直ちに、神は

存するかどうか、そして、もし存するならば、欺瞞者であり得るかどうか、を検討しなければならぬ。というのは、このことが知られていないと、まったく他の何事も決して私に確實であり得ると思われなからである。

しかるにいま、省察の順序は、まず私

の一切の思惟を一定の類に分ち、そしてこの類のうちいつたい何れに真理または虚偽は、本来、存するかを探究することを要求すると思われる。私の思惟のうち或るものはいわばものの像であつて、これにのみ、本来、観念という名称は適當するのである。例えば私が人間と



か、キマイラとか、天とか、天使とか、神とかを思惟する場合がこれである。しかし他のものは、そのほかに、或る他の形相を有している。例えば私が欲する場合、恐れる場合、肯定する場合、否定する場合がこれであつて、この場合私はつねにもちろん或るものを私の思惟の対

象として把捉するが、しかし私の思惟はかかる、もののかたどり以上にさらに或るものを含んでいる。そしてこのようなもののうち或るものは意志あるいは感情と名づけられ、他のものは判断と名づけられる。

いま観念についていえば、それが単に

それ自身において観られ、それを何か他のものに関係させなければ、それは、本来、偽であり得ない。なぜなら、私が山羊を想像しようとしてキマイラを想像しようとして、私がその一を想像するということは他を想像するということに劣らず真であるからである。また意志そのものの、

あるいは感情においても、何ら虚偽を恐れることを要しない。なぜなら、たとい私は曲つたこと、あるいはどこにも有しないものをさえ願望するかもしれないとはいえ、それだからといって私がこれを願望するということとは真でなくはないからである。かようにして残るのはた

だ判断のみであり、これにおいて私は誤らないように用心しなければならぬ。しかるに判断において見出され得る主要な、そして極めて普通の誤謬は、私のうちにある観念が私の外に横たわる或るものに類似している、あるいは一致している、と私が判断するということに存す

る。なぜなら、実際、もし私が単に観念そのものを私の思惟の或る一定の仕方として考察し、何か他のものに関係させなかつたならば、それはほとんど私に何らの誤謬の材料を与え得なかつたからである。

ところでこれらの観念のうち或るも

のは生具のもの、また或るものは外来のもの、さらに或るものは私自身によつて作られたもの、と私には思われる。すなわち、私が、ものとは何であるか、真理とは何であるか、思惟とは何であるか、を理解するということとは、この理解を私は他のどこからでもなく私の本性その

ものから汲み取ると思われる。しかるに  
いま私が噪音を聞く、太陽を見る、熱を  
感じるということは、この感覚を私はこ  
れまで、或る私の外に横たわるものから  
出てくる、と判断した。そして最後にセ  
イレネス、ヒポグリプス、その他これに  
類するものは、私自身によつて構像せら



れたものである。もつとも、おそろくまた私は、すべての観念は外来のものであるとも、あるいはすべての観念は生具のものであるとも、あるいはすべての観念は作られたものであるとも、考えることができる。というのは、私は未だその真の起源を明晰に洞見したのではないか

ら。

しかしここでは主として、いわば私の外に存在するものから取ってこられたものと私の見做すところの観念について、いつたいどのような根拠が私をしてそれらの観念をばかかかもののに類似していると思量するに至らしめるのである。

るかを、探究しなければならぬ。もちろん私は自然によつてかように教えられたと思われるのである。なおその上に、私はそれらの観念が私の意志に、従つてまた私自身に依繋しないことを経験する。というのは、それらはしばしば私の意志に反してさえ現われるからである。

例えはいま私は、私が欲すると欲しない  
とにかかわらず、熱を感じる、そしてそ  
のためには、この感覚、すなわち熱の  
観念が、私とは別のものから、言うまで  
もなく私がそのそばに坐っている火の  
熱から、私にやってくると思える。そし  
てかかるものが他の何物でもなくむし

ろ自己のかたどりを私のうちへ送り込  
むと私が判断するということよりもも  
つともなことはないのである。

いま、これらの根拠が十分に確固たる  
ものであるかどうかを検べてみよう。私  
がここで、私は自然によつてかように教  
えられた、と言う場合、それはただ或る

おのずからなる傾動によつて私がこれ  
を信じるようにせられたということ  
意味するのであつて、或る自然的な光に  
よつて真であると私に明示せられたと  
いうことを意味するのではない。この二  
つのことははなはだ異なっている。すな  
わち、自然的な光によつて私に明示せら

れるあらゆることは、例えば、私が疑う  
ということから私は有るということが  
帰結すること、その他これに類すること  
は、決して疑わしいものであることがで  
きない。なぜなら、この光と同等に私の  
信頼し得るような、またこの光によつて  
私に明示せられることを真でない私

に教え得るような、いかなる他の能力も有り得ないからである。しかるに自然的傾動についていえば、私は以前にすでにしばしば、善を選ぶことが問題であつた場合に、私がこの傾動によりいつそう悪い側に動かされた、と判断したのであつて、何故に私はかかる傾動に或る他のこ



とにおいていつそう多く信頼すべきかを理解しないのである。

次に、たといそれらの観念が私の意志に依繋しないにしても、だからといってそれらが必然的に私の外に横たわるものから出てくるということは確かではない。なぜなら、私がたつたい述べた、

かの傾動は、私のうちにあるとはいえ、私の意志とは別のものであると思われ  
るが、同じようにおそらくまた、それら  
の観念の生産者として、何か他の、未だ  
私に十分に認識せられていない能力が  
私のうちにあるかもしれないからであ  
る。あたかもこれまでつねに私には、私

の眠っているときに、かかる観念がいかなる外物の助けも借りないで私のうちに作られるのが見られたごとくに。

そして最後に、たとい私とは別のものから出てきたにしても、このことからそれらの観念がかかるものに類似していなくてはならぬということは帰結しな

い。反対に、多くの場合において私は両者の間にしばしば大きな差異を見出したように思われる。すなわち、例えば、私は太陽について二つの相異なる観念を私のうちに発見する。その一つはいわば感覚から汲み取ったもので、これはとりわけかの外来のものと私の見做すと

ころの観念のうちには数えらるべきものであるが、これによると私には太陽は極めて小さいものに見える。他の一つはしかるに星学上の根拠から取つてこられたもので、言い換えると或る私に生具の概念から引き出されたもの、それとも何か他の仕方によって作られたもの

であるが、これによると太陽は地球より何倍も大きいものとして示される。そして実際、これら二つの観念の双方が私の外に存在する同一の太陽に類似しているということとは不可能である。そして理性は、最も直接に太陽そのものから出てきたと思われるところの観念が太陽に

最も多く類似していない、と私を説得するるのである。

このすべてのことは、これまで私が、感覚器官を介して、あるいは何らか他の仕方で、観念すなわち自己の像を私に送り込むところの、私とは別の或るものが存在すると信じたのは、確実な判断によ

るのではなく、かえつてただ或る盲目の衝動によるのであるということを、十分に証明するのである。

しかしながら、私のうちにその観念があるものうちで、そのうちの或るものが私の外に存在するかどうかを探究するため、或る他の道が私に与えられて



いる。疑いもなく、これらの観念がただ単に思惟の或る一定の仕方である限りにおいて、私はこれらの観念の間に何らの不等をも認めず、そのすべては同じ仕方で私から出てくると思われる。しかるにその一つは一つのを、他は他のものを表現する限りにおいては、これら

の観念が相互にはなはだ異なっていることは明瞭である。というのは、疑いもなく、実体を私に示すところの観念は、ただ単に様態すなわち偶有性を表現するところの観念よりも、いっそう大きな或るものであり、しかして、いわば、いっそう多くの客観的実在性を己れのう

ちに含んでおり、さらにまた私がそれによつて或る至高にして、永遠なる、無限なる、全智なる、全能なる、そして自己のほかなる一切のものの創造者たる、神を理解するところの観念は、有限なる実体を私に示すところの観念よりも、確かにいっそう多くの客観的実在性を己れ

のうちには有しているからである。

ところでいま、動力的かつ全体的な原因のうちには少くともこの原因の結果のうちにあると同じだけの実在性が存しなくてはならぬということとは、自然的な光によって明瞭である。なぜなら、結果は、原因からでなければ、いっただ

こから、自己の实在性を得ることができ  
るのであろうか。また、いかにして原因  
は、自分でも实在性を有するのでなけれ  
ばこの实在性を結果に与えることがで  
きるのであろうか。そしてここから、い  
かなるものも無から生じ得ないという  
こと、なおまた、より多く完全なものは、

言い換えると自己のうちにより多くの  
実在性を含むものは、より少く完全なも  
のから生じ得ないということ、が帰結す  
る。しかもこれは、単に、その実在性が  
現実的すなわち形相的であるところの  
結果について明白に真であるのみでな  
く、また、そのうちにおいてはただ客観

的実在性が考察せられるところの觀念  
についてもまた真である。くわしく言う  
と、例えば、以前に存しなかつた或る石  
は、その石のうちに含まれるものの全体  
を、あるいは形相的に、あるいは優越的  
に、自己のうちには有するところの或るも  
のによつて生産せられるのでなければ、

いま存し始めることができないうし、また熱は、熱と少くとも等しい程度の完全性を有するものによつてでなければ、以前に熱せられなかつた対象のうちを生ぜしめられることができないし、その他の場合もかくのごとくであるが、単にこれらのみではなく、さらにまた、熱の、あ



るいは石の観念は、熱あるいは石のうちにあると私が考えるのと少くとも同じだけの実在性を自己のうちに含む或る原因によって私のうちに置かれたのでなければ、私のうちにあることができないのである。というのは、たといこの原因は自己の現実的すなわち形相的実在

性の何物も私の観念のうちに移し入れないとはいえ、だからといってこの原因はより少く実在的でなくてはならぬと考うべきではなく、むしろ、観念そのものは私の思惟の仕方であるからして、その本性は、私の思惟から借りてこられる実在性のほか、何ら他の形相的実在性を

自分からは要求しない性質のものであると考うべきであるからである。しかるに或る観念が、他の客観的実在性ではなくて或る特定の客観的実在性を含むと  
いうことは、たしかに、この観念が客観的実在性について含むのと少くとも同じだけの形相的実在性を自己のうちに

有するところの或る原因によつて、これを得てくるのでなくてはならぬ。なぜなら、もし我々がその原因のうちに存しなかつた或るものが観念のうちに見出されるかと看做すならば、この観念は従つてこれを無から得てくることになり、しかるに、ものがそれによつて観念を介して

悟性のうちに客観的に有るところのこの存在の仕方は、たとい不完全であるとしても、たしかにまったく無ではなく、また従つてこの観念が無から出てくるということはあるからである。

なおまた、私が私の有する観念のうちにおいて考察するところの实在性は単

に客観的なものであるからして、この実在性がこの観念の原因のうちに形相的に有ることは必要でなく、かえってこの原因のうちにおいても客観的に有れば十分であろう、と付度《そんたく》してはならない。というのは、この客観的な存在の仕方が観念に、観念そのものの本

性上、合致すると同じように、形相的な

存在の仕方が観念の原因に、——少くと

もその第一にして主要なる原因には——

——この原因の本性上、合致するからであ

る。そしてたといおそらく一の観念は他

の観念から生まれることができるにし

ても、これはしかしこのようにして無限

に溯ることができないのであつて、遂にはいわば或る第一の觀念に達しなくてはならず、しかしてこの觀念の原因は、觀念のうちにおいてはただ客觀的に有る一切の實在性を形相的に自己のうちを含むところの、原型ともいふべきものなのである。かようにして觀念は私のう



ちにおいてあたかも或る影像のごとき  
ものであつて、これは、たしかに、これ  
を得てきたもとのものの完全性に及ば  
ぬことは容易にあり得るが、或るより大  
きなものまたはより完全なものを含み  
得ないことは、自然的な光によつて私に  
明瞭である。

そしてこのすべてのことは、これを考量することが長ければ長いだけ、注意深ければ注意深いだけ、いよいよ明晰に、いよいよ判明に、その真であることを私は認識するのである。しかし私は何を結局これから結論しようとするのであるか。言うまでもなく、もし私の有する観

念のうちの或るものの客観的実在性にして、それが形相的にも優越的にも私のうちに存せず、また従つて私自身がこの観念の原因であり得ぬことが私に確實であるほど、大きいものであるならば、そこから必然的に、私のみが独り世界にあるのではなく、かかる観念の原因であ

るところの或る他のものがまた存在するといふことが帰結するといふことである。他方もし何らかくのごとき観念が私のうちに見出されないならば、私とは別の或るものの存在を私に確實ならしめるところのいかなる論拠もまつたく私は有しないであろう。といふのは、私

は一切を極めて注意深く調査して、これ  
まで何らの論拠も見出し得なかつたか  
らである。

ところで私の有する観念には、ここに  
何ら困難のあり得ないところの、かの私  
自身を私に示す観念のほか、他に、神を  
表現するもの、また物体的な無生的なも

のを表現するもの、また天使を表現するもの、また動物を表現するもの、そして最後に私と同類の他の人間を表現するものがある。

そして他の人間を、あるいは動物を、あるいは天使を示すところの観念についていえば、たとい私のほか何らの人間

も、何らの動物も、何らの天使も世界に  
存しないにしても、これらの観念が、私  
自身について、物体的なものについて、  
また神について私の有する観念から構  
成せられ得るといふことを、私は容易に  
理解するのである。

そして物体的なもの観念について

いえば、これらのうちには私自身によつて生まれ得たとは思われぬほど実在性の大きいものは何も見られない。もし私がこれらをいつそう深く観察するならば、また昨日私が蜜蠟の觀念を吟味したのと同じ仕方で、その一つ一つを吟味するならば、これらにおいて私が明晰に



判明に知覚するものはただ極めてわず  
かであることに気づくのである。言うま  
でもなく、それは、大きさ、すなわち長  
さ、広さ及び深さにおける延長、かかる  
延長の限定によつて生ずる形体、種々の  
形体を具えたものの相互に占める位置、  
及び運動、すなわちかかる位置の変化で

あつて、これになお実体、持続及び数を加えることができる。しかるにその他のもの、例えば光と色、音、香、味、熱と寒、また他の触覚的性質は、ただ極めて不分明に不明瞭にのみ私によつて思惟せられるのであり、従つて私は、それらが真であるのか、それとも偽であるのか、

言い換えると、それらについて私の有する観念が或るものの観念であるのか、それとも何ものでもないものの観念であるのか、をさえ知らないのである。というのは、たとい私は少し前に、本来の意味における虚偽すなわち形相的虚偽は、ただ判断においてのみ見出され得ると

述べたとはいえ、しかし觀念にして何も  
のでもないものを或るものであるかの  
ように表現する場合、たしかに、或る他  
の質料的虚偽が觀念のうち存するの  
である。かくて、例えば、熱と寒につい  
て私の有する觀念は極めてわずかしか  
明晰で判明でないので、これらの觀念に

よつて、寒が単に熱の欠存であるのか、それとも熱が寒の欠存であるのか、あるいはまた両者共に実在的な性質であるのか、それとも共にそうでないのか、私はこれを見分けることができない。ところで或るものの観念であるかのように思われぬいかなる観念も存し得ないの

であるから、もし実際に寒は熱の欠存以外の何ものでもないことが真であるならば、寒を実在的な、積極的に或るもののように私に表現するところの観念が、偽と言われるのは不当でないであらう。その他の場合も同様である。

これらの観念は、たしかに、或る私と

は別の作者に帰せられることを要しない。なぜなら、もし実際にそれらが偽であるならば、すなわち、何ものでもないものを表現するならば、それらが無から出てくること、言い換えると、それらが私のうちにあるのは、私の本性にあるものが欠けており、これがまったく完全で

ないゆえにというよりほか他の原因によるのでないことは、自然的な光によつて私に知られているからであり、もしまたそれらが真であるならば、それらはしかし實に何もものでもないものと區別し得られないほど極めてわずかの實在性をしか私に示さないからして、何故にそ



れらが私自身によつて作られることができ  
ないのか、私にはわからないからで  
ある。

しかるに物體的なものの観念の中で  
明晰で判明であるもののうち、或るもの  
は、すなわち実体、持続、数、その他こ  
れに類するものは、私自身の観念から引

き出され得たように思われる。私が石は  
実体である、すなわちそれ自身によつ  
て存在することができ、るものであると  
思惟し、他方また私は実体であると思惟  
する場合、もちろん私は、私が思惟する  
もので延長を有するものでなく、これに  
反して石は延長を有するもので思惟す

るものでないこと、従つて両《ふた》つ  
の概念の間には非常に大きな差異があ  
ることを理解するにしても、しかし実体  
という点においては両者は一致すると  
思われる。同じようにまた私が、私はい  
ま有ることを知覚し、さらに以前にまた  
或る時のあいだ有つたことを想起する

場合、なおまた私がその数を理解して  
いる種々の思想を有する場合、私は持続と  
数との観念を得、しかる後これをどのよ  
うな他のものへも移すことができる。物  
体的なものとの観念を構成するその他の  
すべてのもの、すなわち延長、形体、位  
置及び運動は、もちろん、私は思惟する

もの以外の何ものでもないのであるからして、私のうちに形相的には含まれないが、しかし、それらは単に実体の或る様態であり、私はしかるに実体であるから、優越的には私のうちに含まれ得ると思われる。

かようにして残るところはただ神の

觀念のみである。この觀念のうちには何か私自身から出てくることのできなかつたものがあるかどうかを考察しなければならぬ。神という名称のもとに私が理解するのは、或る無限なる、独立なる、全智なる、全能なる、そして一方、私自身を、また他方、もしさらに何ものかが

存在するならば、存在するほどのものの一切を、創造したところの、実体である。

まことにこのすべての性質は、私がこれに注意することの深ければ深いだけ、いよいよ、単に私自身から出てきたものであり得ると思われないのである。それゆえに、前述のことから、神は必然的に存

在する、と結論しなければならぬ。

なぜかというに、私は実体であるとい  
うことそのことから、たしかに実体の観  
念が私のうちにあるとはいえ、だからと  
いってそれは、私は有限であるからして、  
実際に無限であるところの或る実体か  
ら出てきたのでなければ、無限なる実体



の観念ではなかつたであらうから。

また、私は無限なるものを真なる観念によつて知覚するのではなく、かえつて、あたかも静止や闇を運動や光の否定によつて知覚するごとく、単に有限なるものの否定によつて知覚する、と思つてはならない。なぜなら反対に、無限なる実

体のうちには有限なる実体のうちにおけるよりも多くの実在性があること、また従つて無限なるものの知覚は有限なるものの知覚よりも、言い換えると、神の知覚は私自身の知覚よりも、いわばいつそう先なるものとして私のうちにあることを、私は明瞭に理解するからである

る。というのは、もし私のうちに、それとの比較によつて私が私の欠陥を認めるところの何らかいつそう完全なる実有の観念が存しなかつたならば、いかにして私は、私を疑うこと、私が欲求すること、言い換えると、或るものが私に欠けていて、私はまったく完全ではないこ

と、を理解したであらうか。

また、おそらくこの神の観念は、熱や寒の観念、およびこれに類するものの観念について少し前に私が気づいたのと同じく、質料的に偽であり、従つてまた無から出てくることができる、と言うことはできない。なぜなら、反対に、この

観念は極めて明瞭で判明であり、そして他のいかなる観念よりも多くの客観的実在性を含んでゐるからして、この観念よりも多くそれ自身によつて真なるもの、偽でないかとの疑いを容れることがいつそう少ないもの、は存しないからである。私は言う、この最も完全にして無

限なる実有の観念はこの上なく真であるのである、と。というのは、たといおそらくかくのごとき実有は存在しないと仮想することができるとしても、この実有の観念が、先に寒の観念について言ったごとく、何ら実在的なものを私に示さないと仮想することはできないから。

この観念はまたこの上なく明晰で判明であるのである。なぜなら、何であれ私  
が実在的にして真なるものとして、また  
何らかの完全性をもたらしものとして  
明晰に判明に知覚するものは、全部この  
観念のうちに含まれているから。またこ  
の場合、私が無限なるものを把握しない

ということ、あるいは神のうちには私の把握することのできぬ、またおそらく思惟によつては何らか触れることさえできぬ、他の無数のものが存するといことは、妨げとはならない。というのは、有限であるところの私によつて把握せられないということ、無限なるものの本



質に属するものであるから。そして私が  
まさにこのことを理解すること、そし  
て私の明晰に知覚し、何らかの完全性を  
もたらすものとして知る一切のものが、  
なおおそらくまた私の知らない他の無  
数のものが、形相的にか優越的にか神の  
うちに存すると判断すること、私が神

について有する観念が私のうちにある  
すべての観念のうち最も真で、また最も  
明晰で判明であるためには、十分なので  
ある。

しかしおそらく私は自分で理解して  
いるより以上の或るものであるかもし  
れない、しかして私が神に帰するところ

の一切の完全性は、たとい私においては未だ自己を顕現せず、また現実性にもたらされないにしても、何らか可能的には私のうちにあるかもしれない。というのは、私は実際に私の知識が漸次に増大せられることを経験し、そしてそれがかようにして無限にまですます増大せら

れないように何が妨げるのか、また何故に、この知識がかように増大せられたとき、これによつて私が神の余のすべての完全性に達することができないのか、また最後に、何故に、かかる完全性に至る力が、もし実際に私のうちにあるならば、かかる完全性の観念を作り出すに十分

でないのか、私は理解しないから。

否、かかることは何らあり得ない。すなわちまず第一に、私の知識が一步一步増大せられるということ、また未だ現実的にはないところの多くのものが可能的に私のうちにあるということとは真であるにしても、かくのごとくことは何ら

神の観念に適しない。神の観念のうちには疑いもなく単に可能的であるものは何もない。またこの一歩一歩増大せられるということとはまさに不完全性の極めて確実な証明なのである。次に、たとえば私の知識は常にますます増大せられるとはいえ、しかも私は、それが、だから

といつて、決して現実的に無限なものにならないであろうということを理解する、なぜなら私の知識はこれ以上の増大を容れないというところには決して達しないであろうから。しかるに神は、その完全性には何もものも加えられ得ないというように、現実的に無限である、と

私は判断するのである。そして最後に、観念の客観的有は、本来からいえば無であるところの単に可能的な有によつてではなく、かえつてただ現実的な有、すなわち形相的な有によつてのみ生ぜしめられ得る、ということをも、私は知覚するのである。



まことにこのすべてのことには、注意

深く考察するとき自然的な光によつて明瞭でないものは何もないのである。しかしながら私がそんなに注意しないで、感覺的なものの像が精神の眼を盲にする場合、何故に私よりもいつそう完全な実有の観念は必然的に、或る実際にいつ

そう完全なる実有から出てこなければならぬかを、私は容易に想起しないからして、さらに進んで、かかる観念を有するところの私自身は、もしかかかる実有が何ら存在しなかつたならば、存することができたかどうか、を探究したいと思う。

いったい私は何者から出てきたので

あろうか。もちろん私は私自身から、それとも両親から、それとも何か他の、神よりも少く完全なものから。というのは、神よりもいつそう完全なものは、神と同じ程度に完全なものでさえ、何も思惟せられることも想像せられることもでき

ないのであるから。

けれども、もし私が私自身から出てきたとすれば、私は疑うということがなかつたであろうし、また願望するということもなかつたであろうし、またおよそ何物かが私に欠けているということもなかつたであろう。なぜなら、その何らか

の観念が私のうちにある一切の完全性を、私は私自身に与えたであらうし、かようにして私自身は神であつたであらうから。また私に欠けているものはたぶん、すでに私のうちにあるものよりも、得られるにいつそう困難であるかもしれないと考えるはならぬ。なぜなら、反

対に、私、言い換えると思惟するもの、すなわち思惟する実体が無から生み出すことは、単にこの実体の偶有性であるところの、私の知らないところの多くのものの知識を得ることよりも、遥かにいっそう困難であつたといふことは明瞭であるから。そして確かに、もし私がか

のいつそう大きなもの、すなわち思惟する実体を生み出すという完全性を自分によつて持つたとすれば、私は少くともかのいつそう容易に持たれ得るもの、すなわちこの実体の偶有性であるところの多くのものの知識を自分に拒まなかつたであらう。のみならず私は神の觀念

のうちに含まれると私の知覚するもの  
の他のいかなるものをも自分に拒まな  
かつたであろう。なぜなら、たしかに、  
そのいかなるものも作り出されるにい  
つそう困難ではないと私には思われる  
から。そしてもし何らかのものが作り出  
されるにいつそう困難であつたとすれ



ば、実に私が持つあらゆる他のものは自分によつて持ったのであるからして、私  
はかかるものにおいて私の力が制限せ  
られるのを経験したであらうゆえに、確  
かにかかるものはまた私にいつそう困  
難と思われたであらう。

なおまた、おそらく私はいま存するご

とくつねに存したと仮定するにしても、あたかもこの仮定から私の存在のいかなる作者も追求せらるべきではないということが帰結したかのように称して、これらの論拠の力を逃れることは私にはできない。なぜなら、私の生涯の全時間、そのいずれの箇所も余の部分も

分にまったく依繋しないところの無数の部分に分かたれ得るゆえに、私が少し前に存したということから私がいま存しなくてはならぬということとは、この瞬間に或る原因がいわばもう一度私を創造する、言い換えると私を保存する、のではない限りは、帰結しないからである。

すなわち、時間の本性に注意する者にとつては、何らかのものがその持続する箇々の瞬間において保存せられるためには、そのものが未だ存在しなかつたとした場合、それを新たに創造するため必要であつたのとまったく同じだけの力と働きとが必要であることは、明白で

ある。してみれば保存はただ考え方によつてのみ創造と異なるといふことはまた、自然的な光によつて明瞭であることがらの一つであらう。

かくしてここに私は、いま存するところの私が少し後にも存するであらうようにすることのできる或る力を私が有

するかどうか、私自身に対して問わなくてはならない。というのは、私は思惟するもの以外の何物でもないからして、あるいは少くとも今はまさしくただ私の思惟するものであるところの部分の問題なのであるからして、もし何かかような力が私のうちにあつたとすれば、疑い

もなく私はこれを意識したはずであるから。しかるに私は何らかかるものの存することを経験していない。そしてまさにこのことから私は、私が或る私とは別の実有に依繋することを、極めて明証的に認識するのである。

しかしたぶんこの実有は神ではない

かもしれない、そして私は両親によつてか、それとも何か他の、神よりも少く完全な、原因によつて、作り出されたのかもしれない、否、決してかかることはない。すでに前に言ったごとく、原因のうちには結果のうちにあるのと少くとも同じだけの実在性がなくてはならぬこ



とは分明である。そしてこのゆえに、私は思惟するもので、また神の或る観念を私のうちに有するものであるからして、どのような原因が結局私に振り当てられるにしても、それはまた思惟するものであり、そして私が神に帰する一切の完全性の観念を有する、と言わねばならぬ。

しかしてそれについて再び、それ自身から出てくるのか、それとも他のものから出てくるのか、と追求することができるとすなわち、もしそれ自身から出てくるとすれば、前述のことからそれが自身神であることは明かである。なぜならもちろん、それは自分自身によって存在する力

を有するのであるから、それは疑いもな  
くまた、その観念をそれが自分自身のう  
ちに有するところの一切の完全性を、言  
い換えると、神のうちにあると私が考え  
るところの一切の完全性を、現実的に所  
有する力をも有するはずであるから。し  
かるにもし他のものから出てくるとす

れば、この他のものについて更《あらた》めて同じ仕方、自分自身から出てくるのか、それとも他のものから出てくるのか、と追求せられ、かようにして遂には神であろうところの究極の原因にまで達せられるであろう。

なぜというにこの場合、とりわけ、単

に私をかつて作り出した原因のみがここで問題であるのではなく、むしろ主として私を現在保存しているところの原因が問題であるのであるからして、無限への進行があり得ないことは十分に明かであるから。

なおまた、私を作り出すためにはおそ

らく多くの部分的原因が協力したのであつて、私はその一つから私の神に帰する完全性のうちの或る一つの観念を、他のものから他の完全性の観念を受け取つたのであり、従つてこれら一切の完全性はたしかに宇宙のうちどこかに見出されるであらうが、しかしこれら一切が

同時に、神であるところの或る一つのものにおいて、結合せられたものとしては見出されないであろう、と想像することもできない。なぜなら、反対に、統一、単純性、すなわち神のうちにある一切のものとの不可分離性は、神のうちにあると私が理解する主要な完全性のうちの一

つであるからである。また確かに、神の  
かかる一切の完全性の統一の観念は、私  
をしてまた他の完全性の観念をも有せ  
しめたのではないような、何らかの原因  
によつて、私のうちに置かれ得なかつた  
はずである。というのは、この原因は、  
私をして同時にこれらの完全性がいつ



たい何ものであるかを知らしめるようにしたのでない限りは、私をしてこれらの完全性を一緒に結合せられた、分離し得ぬものと理解せしめるようにすることはできなかつたはずであるから。

最後に、両親についていえば、私がかつて彼等に関して考えたすべてのこと

は真であるかもしれないが、しかしたしかに彼等は私を保存するのではなく、また、私が思惟するものである限り、決して私を作りだしたのでもない。むしろ彼等は単に、私、言い換えると精神——私はいまだ精神のみを私と認めるのである——がそのうちにあると私の判断

したところの質料のうち、或る一定の性情を据えつけただけなのである。従つてここでは彼等に関して何らの困難もあり得ない。かえつてぜひとも次のように結論しなければならぬ、すなわち、私が存在するということ、そして最も完全な実有の、言い換えると神の、或る一定

の観念が私のうちにあるということ、ただこのことから、神もまた存在するということが極めて明証的に論証せられる、と。

残るところはただ、いかなる仕方ではかかる観念を神から得たかを考査することである。すなわち、私はそれを感じる

覚から汲んだのではなく、また決して感  
覚的なものが感覚の外的器官に現われ  
るもしくはは現われるように思われる場  
合、かかるものの観念のつねとするごと  
く、私が期待しないのに私にやってきた  
のでもない。またそれは私によって構像  
せられたのでもない。なぜなら、明かに、

私は何物をもそれから引き去ることができず、何物をもそれにさらに加えることができないから。従つて残るところは、あたかも私自身の観念がまた私に生具するのと同じように、この観念が私に生具するということである。

そしてたしかに、神が私を創造するに

あたつて、ちようど技術家が彼の作品に  
印刻した自己のしるしであるかのよう  
に、この観念を私のうちに植えつけたと  
いうことは、不思議ではない。またこの  
しるしが作品そのものとは別の或るも  
のであることも必要ではない。しかしな  
がら、神が私を創造したということ、た

だこの一つのことから、私が何らかの仕方  
方で神の姿と像（かたどに従つて作  
られたということ、また神の觀念がその  
うちに含まれるこの像りが、私の私自身  
を知覚するに用いるのと同じ能力を持  
つて私によって知覚せられるというこ  
とは、極めて信じ得ることである。言い



換えると、私が私自身のうちに精神の眼を向けるとき、単に私は、私が不完全で、他のものに依繋するものであり、そしてますますいつそう大きなものすなわちいつそう善いものをと無限定に喘ぎ求めるものであることを理解するのみでなく、同時にまた私は、私の拠って依繋

するところのものが、かかるいつそう大きなものの一切を、単に無限定に、可能的にはなく、かえつて実際に無限に自己のうちには有し、そしてかようにして神であることを理解するのである。そして論証の全体の力は次のところに存するのである、すなわち、私の現にあるごと

き本性を有する私、まさに神の観念を自己のうちにも有する私は、実際に神がまた存在するのでなければ、存在することがあり得ない、と私の認知するところに存するのである。ここに私が神と言うのは、その観念が私のうちにあるその神、言い換えると、私の把握し得ぬ、しかし何ら

かの仕方では思惟によつて触れ得る、一切の完全性を有し、そしていかなる欠陥からもまつたく免れているものである。このことから、神が欺瞞者であり得ないことは、十分に明かである。なぜなら、すべての瞞着と詐欺とが或る欠陥から出てくるということとは、自然的な光によつ

て明瞭であるから。

しかしながら、このことをいつそう注意深く考査し、同時にまたここから引き出され得る他のもろもろの真理の中へ尋ね入るに先立ち、私はここでしばらく神そのものの観想のうちに停まり、その属性を静かに考量し、そしてその無辺な

る光明の美をば、これにいわば眩惑せられた私の智能の眼の耐え得る限り多く、凝視し、讚嘆し、崇敬しすることが適當であると思う。なぜなら、ただこの神的莊嚴の觀想にのみ他界の生活のこの上ない淨福の存することを我々は信仰によつて信じているのであるが、そのよう

にまた今我々は、かかる観想によつて、もとよりそれは遥かに少く完全なものであるとはいへ、この世の生活に置いて許された最大の満足を享受しうることを経験するからである。

「#改丁」

## 省察四

真と偽とについて。

私はこの数日、私の精神を感覚から引き離すことにかくも慣れてきたし、また私は、物的なものについてほんとうに



知覚せられるものがきわめてわずかで  
あり、人間の精神についてはしかし遙か  
に多くのものが、神についてはさらに遙  
かに多くのものが認識せられることを  
かくも注意深く観察したので、今や私は  
何らの困難もなしに思惟をば想像せら  
れるべきものから転じて、ただ悟性によ

つてのみ捉えらるべきもの、そして一切の物質から分離せられたものに向わせうるであらう。まことに私は人間の精神について、それが思惟するものであり、長さ広さ及び深さにおける延長を有せず、そして物体に属するところの何物をも有せざるものである限りにおいて、い

かなる物体的なものの観念よりも遙かに多くの判明な観念を有している。そして私が疑うということ、すなわち不完全で依存的なものであるということに注意するとき、独立な完全な実有の、言い換えると神の、かくも明晰で判明な観念が私に現われ、そしてかくのごとき観念

が私のうちにあるということ、すなわち私、かかる観念を有する私が存在するということ、この一つのことから私は、神がまた存在するということ、そしてこの神に私の全存在があらゆる箇々の瞬間において依存するということをかくも明瞭に結論するのであって、かようにし

て私は人間の智能によつて何物もこれ以上明証的に、何物もこれ以上確實に認識せられ得ないと確信することができ  
る。そしていま私は、眞の神の、すなわち知識と智慧とのすべての宝を秘蔵する神の、かかる観想から、余のものの認識にまで達せられるところの、或る道を

認めるように思われるのである。

すなわち、まず第一に私は、神が私を  
かつて欺くことはあり得ないというこ  
とを認知する。なぜならすべての瞞着あ  
るいは詐欺のうちには何らかの不完全  
性が見いだされるから。そしてたとい欺  
き得るといふことは聡明あるいは力の

ある証拠と見え得るにしても、欺くことを欲するということは疑いもなく悪意かそれとも薄弱かを証するのであつて、従つてまた神にふさわしくないのである。

次に私は私のうちに或る判断能力のあることを経験するが、私はこれを確か

に、私のうちにある余のすべてのものと同じく、神から受け取ったのである。そして神は私を欺くことを欲しないからして、神はもちろんこの能力を、私がこれを正しく使用するときにも過ち得るようなものとして私に与えなかつたはずである。



このことについては、もしそこから、

だからして私は決して過ち得ないことが帰結するように思われたのでなければ、何らの疑いも残らなかつたであろう。

というのは、もし私のうちにあるどのようなものでも私はこれを神から得るとすれば、そしてもし神は私に過つ能力を

何ら与えなかつたとすれば、私はかつて過ち得るようには思われたいから。そしてかようにして実際、私がただ神についてののみ思惟し、私を全く神に向けている間は、私は誤謬または虚偽の何らの原因をも発見しないのである。しかしながら、すぐ後で、再び自分に還つてくると、私

はそれにもかかわらず私が無数の誤謬にさらされていることを経験し、その原因を探究すると、私は単に神の、すなわちこの上なく完全な実有の、実在的で積極的な観念のみではなく、またいわば無の、すなわちあらゆる完全性からこの上なく離れているものの、或る消極的な観

念が現われること、そして私があたかも  
神と無との間の、すなわち最高の実有と  
非有との間の中間者をなしており、かよ  
うにして、最高の実有から創造せられた  
限りにおいては、私のうちにはもちろん  
欺きまたは誤謬に誘うものは何も存し  
ないが、しかし或る仕方でもまた無に、す

なわち非有に与る限りにおいては、言い換えると、自分が最高の実有でなく、そしてきわめて多くのものが私に欠けている限りにおいては、私が過つたのは不思議でないことに、私は気づくのである。そしてかようにして私は確かに、誤謬は、それが誤謬である限りにおいては、神に

依存するところの或る実在的なものではなく、ただ単に欠陥であるということ、従つてまた私が過つには、この目的のためには神から賦与せられた或る能力が私に必要であるのではなく、かえつて私が神から得ているところの真を判断する能力の私において無限でないことによ

って、私の過つことの生じるといふことを、理解するのである。

さりながら、このことは未だまったく私を満足させない。というのは、誤謬は純粹な否定ではなく、かえって欠存、すなわち何らかの仕方で私のうちに存しなくてはならなかつた或る認識の欠乏

であるからである。そして神の本性に注意するとき、その類において完全でない、すなわちそれに本来属すべき或る完全性の欠けている何らかの能力を神が私のうちに残したということはありません。いように思われる。なぜならもし、技術者がいつそう老練であればあるだけ、い



よいよいっそう完全な作品が彼によつて作り出されるとすれば、かの一切のもの、の最高の製作者によつて、あらゆる点において完璧でない何ものが作られ得たであろうか。また神が私を決して過たないようなものとして創造し得たはずであるということとは疑わしくないし、ま

た神がつねに最も善いものを欲するはずであるということも疑わしくない。しからば、私が過つということとは過たぬと  
いうことよりもいつそう善いことでも  
もあるうか。

これらのことをいつそう注意深く考  
量するならば、まず、その理由を私の理

解しない或るものが神によつて作られるとしても、私にとつて驚くべきことではないということ、またおそらくそれが何故に、あるいはどういう仕方で、神によつて作られたかを私の把握しないさうに或る他のもののあるのを私が経験するといふわけで、神の存在について疑

うべきではないということ、が心に浮かんでくるのである。なぜなら私は、私の本性が極めて薄弱で制限されたものであり、神の本性はこれに反して広大で、把握し得ぬ、無限なものであることを既に知っているから、このことからまた私は十分に、その原因の私には知られてい

ない無数のことを神はなし能うということを知るからである。そしてこのただ一つの根拠から私は、目的から引き出されるのをつねとする原因の類の全体は物理的なものにおいて何らの適用をも有しない、と私は思量するのである。と  
いうのは、私が神の目的を探究し得ると

考えるのは向う見ずのことであるから。

さらに、神の作品が完全なものであるかどうかを我々が尋求するたびごとくに、或る一つの被造物を切り離してではなく、一切のものを全体として考察しなければならぬ、ということが心に浮んでくるのである。なぜなら、もしそれが単独

であつたら、おそらく正当に、極めて不完全なものと思われるものも、世界において部分の地位を有するものとしては極めて完全なものであるから。そしてたとい、私が一切のものについて疑おうと欲したことから、これまでのところ私と神とが存在するといふほか何物も確實

に認識しなかつたにしても、しかし神の無辺の力に気づいたことから、他の多くのものが神によつて作られたはずであり、あるいは少くとも作られ得るはずであり、かくして私はものの全体において部分の地位を占めるはずであるということ。私を私は否定し得ないのである。



そこで、私自身にいつそう近く寄って、

私の誤謬（これのみが或る不完全性を私のうちにおいて証するのである）がいつたいどういうものであるかを探究すると、私は、これが二つの同時に一緒に働く原因に、言うまでもなく私のうちにある認識の能力と選択の能力すなわち自

由意志とに、言い換えると悟性にと同時に意志に、依繋することを認める。とい  
うのは、単に悟性によつては私はただ観  
念を、それについて判断を下し得るとこ  
ろの観念を知覚するのみであり、そして  
厳密にかように観られた観念のうちに  
は本来の意味におけるいかなる誤謬も

見出されないから、なぜなら、たといたぶん、その観念が何ら私のうちに存しないところの無数のものが存在するにしても、しかし本来は、かかる観念が私に欠存していると言わるべきではなく、かえってただ否定的に、かかる観念を私は有していないと言わるべきであるから

である。疑いもなく、神は私に与えたよ  
りもいつそう大きな認識の能力を私に  
与えるべきであつたと言うことを証明  
する何らの根拠も私は提供し得ないの  
であるから。そしてたとい私は神を老練  
な技術者であると理解するとはいえ、だ  
からといって私は神が、自己の作品のい

ずれの箇々のうちにも、その或るもの  
うちに置き得るところのすべての完全  
性を、置くべきであつたとは考えない。  
なおまた実に私は、十分に広くて完全な  
意志、すなわち意志の自由を私が神から  
授からなかつたと訴えることはできな  
い。なぜなら、私は実際、意志がいな

る制限によつても局限せられていない  
ことを経験するのであるから。そして極  
めて注目すべきことと私に思われるの  
は、私のうちにはこれほど完全な、これ  
ほど大きなものは他には何もないので、  
私にはこれがさらにいつそう完全な、す  
なわちいつそう大きなものであり得る

とは理解せられ得ないということである。というのは、例えば、もし私が理解の能力を考察するとすれば、私は直ちにそれが私のうちにおいてはなはだ小さくて、非常に有限なものであることを知り、そして同時に私は或る他の遙かにいっそう大きな、いな最も大きな、無限な

能力の観念を作り、そして私がかかる能力の観念を作り得ることそのことから、私はかかる能力が神の本性に属することを知覚するからである。同じように、もし私が想起の能力あるいは想像の能力、あるいは何か他の能力を考査するとしても、決して私は、それが私のうちに



おいて弱くて局限せられていて、神において  
は広大であることを私の理解しないものは  
何も発見しないのである。ただ意志すなわち  
意志の自由のみは、私はこれを私のうちにお  
いて何らいっそう大きなものの観念を捉え得  
ないほど大きなものとして経験するのであり、  
かくて

私がいわば神の或る姿と像りを担うことを理解せしめる根拠は、主としてこの意志である。なぜならこの意志は神においてには私のうちにおいてよりも、一方この意志に結びつけられていて、これをいっそう強固にし、いっそう有効にするところの、認識と力との点において、他方

この意志がいつそう多くのものに拡張  
られるところから、その対象の点におい  
て、比較にならぬほどいつそう大きいと  
はいえ、しかしそれ自身において形相的  
にかつ厳密に観られるならば、いつそう  
大きいとは思われぬから。意志という  
ものはただ、我々が或る一つのことを為

すもしくはは為さぬ（言い換えると肯定するもしくはは否定する、追求するもしくはは忌避する）ことができるというところに存するからである、あるいはむしろそれはただ、悟性によつて我々に呈示せられているものを我々が肯定しもしくはは否定し、すなわち追求しもしくはは忌避する

にあたつて、いかなる外的な力によつてもそうするようには決定せられてはいないと感じて、そうするようには動かされるというところに存するからである。というのは、私が自由であるためには、私が一方の側にも他方の側にも動かされることができるといふことは必要でなく、

かえつて反対に、私が真と善との根拠を  
その側において明証的に理解するゆえ  
にせよ、あるいは神が私の思惟の内部を  
そうするように処置するゆえにせよ、私  
の一方の側に傾くことが多ければ多い  
だけ、ますます自由に私はその側を選択  
するのであるから。実に神の聖寵も、自

然的な認識も、決して自由を減少せしめるのではなく、かえってむしろこれを増大し、強化するのである。しかるに、何らの根拠も私を他方の側によりも一方の側にいつそう多く駆り立てない場合に私が経験するところの、かの不決定は、最も低い程度の自由であり、そして意志

における完全性ではなくて、ただ認識に  
おける欠陥、すなわち或る否定を証示す  
るのである。なぜなら、もし私がつねに  
何が真であり善であるかを明晰に見た  
ならば、私は決していかなる判断をすべ  
きかあるいはいかなる選択をすべきか  
について躊躇しなかつたはずであり、そ



してかようにして、たといまったく自由であつたにしても、決して不決定ではあり得なかつたであらうから。

ところでこれらのことから私は次のことを知覚する。すなわち、私が神から授かっている意欲の力は、それ自身として観られた場合、私の誤謬の原因ではな

いということ。なぜなら、この力は極めて広くて、その類において完全であるから。また理解の力もそうではないということ。なぜなら、私はこの力を神から理解するために授かっているゆえに、私の理解するあらゆるものは、疑いもなく私はこれを正しく理解し、そしてこれ

において私が過つということはありません。ないから。しからばどこから私の誤謬は生じるのであろうか。言うまでもなくただこの一つのことから、すなわち、意志は悟性よりもいつそう広い範囲に及ぶゆえに、私が意志を悟性と同一範囲の内に限らないで、私の理解しないものにま

でも広げるといふことからである。かか  
るものに対して意志は不決定であるゆ  
えに、容易に意志は真と善とから逸脱し、  
かようにして私は過つと共にまた罪を  
犯すのである。

例えば、私がこの数日、何らかのもの  
が世界のうちに存在するかどうかを考

査し、そして私がこのことを考査すると  
いうこととそのことから私は存在すると  
いうことが明証的に帰結するのを認め  
たとき、実に私は私のかくも明晰に理解  
することは真であると判断せざるを得  
なかつたのである。これは、或る外的な  
力によつてそうするようによに強要せられ

たというのではなく、かえって悟性のうちにおける大きな光から意志のうちにおける大きな傾向性が従つてきたゆえであつて、かようにして私がそのことに對して不決定であることが少なければ少ないだけ、ますます多く私は自発的にそして自由にそのことを信じたのである

る。しかるに今、私は私が或る思惟するものである限りにおいて存在することを知っているのみでなく、さらにまた物体的本性の或る観念が私に現われてい、そこで、私のうちにあるところのあ、るいはむしろ私自身であるところの思惟する本性が、かかる物体的本性とは別

のものであるか、それとも両者は同一のものであるか、という疑いが生じてくる。そして私は、この一方を他方よりも多く私に説得する何らの根拠も未だ私の悟性に現われていないと仮定する。まさにこのことから確かに私は、両者のいずれれを肯定すべきか若しくは否定すべきか、



それともまたこのことについて何も判断を下すべきでないか、に対して不決定であるのである。

実にまたこの不決定は、単に悟性によつてまったたく何も認識せられないものに及ぶのみでなく、また一般に、意志がそれについて商量している時に當つて

悟性がそれを十分に分明に認識して  
いないというすべてのものにも及ぶので  
ある。なぜなら、たとひ蓋然的な推測が  
私を一方の側へ引張るにしても、それが  
単に推測であつて、確實なそして疑い得  
ぬ根拠ではないというただ一つの認識  
は、私の同意を反対の側へ動かすに十分

であるから。このことを私はこの数日、以前に極めて真なるものと私の信じたすべてのものをば、この一つのこと、すなわちそれについて或る仕方で疑われ得ることがわかったといことによつて、まったく偽なるものであると仮定したときに、十分に経験したのである。

ところで何が真であるかを十分に明晰に判明に知覚していない場合、もし実際私が判断を下すことを差し控えるならば、私のかくすることが正しく、私は過つことがないのは明かである。しかるにもし私が肯定するもしくは否定するならば、そのとき私は意志の自由を正し

く使用していない、そしてもし偽である側に私を向わせるならば、明かに私は過つ、またもし他の側を掴んで、偶然に、なるほど真理に当りはするにしても、だからといって私は罪を免れないであろう。なぜなら、悟性の知覚がつねに意志の決定に先行しなくてはならぬことは、

自然的な光によつて明瞭であるから。そしてこの自由意志の正しくない使用のうちには誤謬の形相を構成するところのかの欠存が内在するのである。すなわち、欠存は、作用そのもののうちに、これが私から出てくる限りにおいて、内在するのであつて、私が神から受取つた能力の

うちに内在するのではなく、また神に依存する限りにおいての作用のうち、内に在するのでもない。

そこで私は、神が私に与えたよりもいっそう大きな理解の力、すなわちいっそう大きな自然的な光を私に与えなかつたということを訴うべき何らの理由も

有しない。なぜなら、多くのものを理解  
しないということとは有限な悟性にとつ  
て当然であり、そして有限であるという  
ことは創造せられた悟性にとって当然  
であるから。むしろ私は、決していかな  
るものをも私に負わないところの神に、  
彼から授けられたものに対して、感謝す



べきであるのであつて、彼が私に与えなかつたものをば、彼によつて私が奪われたもの、すなわち彼が私から引き上げたものと思うべきではないのである。

なおまた私は、神が私に悟性よりもいっそう広く及ぶところの意志を与えたということを訴うべき理由を有しない。

なぜなら、意志はただ一つのもの、そしていわば不可分のものに存するゆえに、その本性は何らかのものがそれから取り去られ得ることを許さないと思われ  
るから。そして実に、かかる意志が広大であれば広大であるだけ、ますます大きな感謝を私はこれを与えた者に対して

負うのである。

また最後に、私がそれにおいて過つところの判断、すなわち意志の作用を喚び起すために神が私と協力するといふこともまた、私は歎いてはならない。なぜなら、この作用は、それが神の依存する限りにおいては、まったく真であり善で

あるし、また私がこれを喚び起し得ると  
いうことは、もしかしたら喚び起し得な  
かったということよりも、私において或  
る意味でいっそう大きな完全性である  
からである。しかるに、虚偽と罪過との  
形相的根拠がただそれにのみ存すると  
ころの欠存は、神の何らの協力をも必要

としない、それは何ら実在的なものではなく、そしてもしその原因として神に係させられるならば、それは欠存と言わ  
るべきではなく、かえつてただ否定と言  
わるべきであるから。なぜなら実に、そ  
の明晰かつ判明な知覚を神が私の悟性  
のうちに置かなかつたところのものに

対して、同意しもしくはは同意しない自由をば神が私に与えたということとは、神における何らの不完全性でもなく、かえつて、私がかかる自由を善く使用せず、私の正確に理解しないところのものについて私が判断を下すということとは、疑いもなく私における不完全性であるから

である。しかしながら、たとい私が自由であること、そして有限な認識を有するものであることはもとのごとくであるにしても、私が決して過たないようになるといふことは、神によつて容易になされ得たと思う。すなわち、もし神が私の悟性に、私のいつか商量するであろうす

べてのものもの明晰で判明な知覚をば、賦  
与したか、それともただ私の記憶に、私  
の明晰にそして判明に理解しない何物  
についても決して判断してはならない  
ということをば、私が決してこれを忘れ  
得ないほど堅く刻みつけたか、すれば宜  
かったわけである。そしてもし私がかく



のごときものであるように神によつて作られていたならば、私は、私が或る全体としての意味を有する限りにおいて、現在私があるよりもいつそう完全であつたろう、ということをば私は容易に理解する。しかしながら、だからといって、宇宙の或る部分は誤謬から免れてい

ないが他の部分は免れているという場合のほうが、すべての部分がまったく類似しているという場合よりも、宇宙という全体のうちには或る意味でいつそう大きな完全性が存するはずであるということを、私は否定し得ない。そして神は私が世界においてすべてのうち最も

主要であり最も完全である役を受持つことを欲しなかつたからとて、私は訴うべき何らの権利をも有しないのである。

またさらに、私は上述の第一の仕方ですなわち商量せらるべきすべてのものの明証的な知覚に依存するところの仕方、誤謬を絶つことができないにして

も、私はもう一つの仕方です。すなわちただ、ものの真理が私に明白でないたびごとに、判断を下すことを差し控えるべきであることを想起するということに依存するところの仕方です。誤謬を絶つことができるのである。なぜなら、たとい私はつねに一つの同じ認識に堅く固執す

ることができないという弱さが私のうちにあることを経験するにしても、しかし私は注意深いそしてしばしば繰り返された省察によつて、その必要があるたびごとに、かのことを想起し、そしてかようにして過たない或る習慣を得るようにならなければならない。

まさにとこのことに人間の最大のそして  
て主要な完全性は存するゆえに、私は今  
日の省察によつて、誤謬と虚偽との原因  
を探究したのであるからして、少からぬ  
ものを獲得したと思量する。そして実  
この原因は私が説明したのは別のも  
のであることができない。なぜなら、判

断を下すにあたって意志をば、ただ悟性  
によつて意志に明晰に判明に示される  
ところのものにのみ及ぶように、制限す  
るたびごとに、私が過つということとはま  
ったく生じ得ないからである。すべて明  
晰で判明な知覚は疑いもなく或るもの  
であり、従つて無から出てきたものであ

り得ず、かえつて必然的に神を、私はい  
う、かの最も完全な、欺瞞者であること  
と相容れないところの神を、作者として  
有している、それゆえにかかる知覚は疑  
いもなく真である。また今日私は単に、  
決して過たないためには私は何を避く  
べきであるかを学んだのみでなく、同時



にまた真理に達するためには何を為すべきであるかも知学んだ。すなわち、もし私がただ私の完全に理解するすべてのものに十分に注意し、そしてこれを私のいつそう不分明にいつそう不明瞭に把捉する余のものから分離するならば、私は確かに真理に達するはずである。かく

することに私はこれからは注意深く努力しよう。

「#改訂」

## 省察五

物質的なものの本質について。そし

て再び

神について、神は存在すると  
いうこと。

神の属性について、私自身のすなわち  
私の精神の本性について、私の探究すべ  
き多くのことがなお残っている。しかし

これはおそらく他の機会に再び取り上げられるであろう。今は（真理に達するためには私は何を避くべきでありまた何を為すべきであるかに気づいた後）、過ぐる数日私の陥っていた懷疑から抜け出すことに努めるといふこと、そして物質的なものについて何か確実なもの

を得ることができるかどうかを見ると  
いうこと、よりも緊要なことはないと思  
われる。

しかも、何かかかる物質的なものが私  
の外に存在するかどうかを調べるに先  
立って、私はこのものの観念をば、それ  
が私の思惟のうちにある限りにおいて、

考察し、そしていったいそのうちのどれ  
が判明であり、どれが不分明であるかを  
見なくてはならない。

言うまでもなく私は量を判明に想像  
する、これを哲学者たちは普通に連続的  
なものと呼んでいる、すなわちこの量の、  
あるいはむしろ定量を有するものの、長

さ、広さ及び深さにおける延長を判明に想像する。このうちにおいて私は種々の部分を数える、これらの部分に私は各種の大きさ、形体、位置、及び場所の運動を属せしめ、またこれらの運動に各種の特徴を属せしめる。

また、単にこれらのものが、かように

一般的に観られた場合、私にまったく知られていて分明であるのみではなく、さらにまた私は、注意するならば、形体について、数について、運動について、及びこれに類するものについて、無数の特殊なものを知覚するのであって、その真理は極めて明瞭であり、また極めて私



の本性に適合しているので、それを私が初めて発見するとき、或る新しいことを学ぶというよりはむしろすでに私が知っていたことを想起するかのごとくに思われる、言い換えると、夙《つと》に確かに私のうちに存したが以前にはそれに精神の眼を向わせなかつたところ

のものに、私が初めて注意するかのごとくに思われるのである。

そしてここに最も注目すべきことと私の考えるのは、たとい私の外にたぶんどこにも存在しないにしても、無であるとは言われ得ない或るものの無数の観念をば私が私のところで発見するとい

うことである。かかるものは、たとい私  
によつて或る意味で随意に思惟せられ  
るとはいえ、私によつて構像せられるの  
ではなく、かえつて自己の真にして不変  
なる本性を有しているのである。かくて、  
例えば、私が三角形を想像するとき、た  
ぶんかような形体は私の思惟の外に世

界のうちどこにも存在せず、またかつて存在しなかつたにしても、それには確かにその或る限定せられた本性、すなわち本質、すなわち形相があるのであつて、これは不変にして永遠であり、私によつて構像せられたものではなく、また私の精神に依存するものでもない。このこと

は、この三角形について種々の固有性が、すなわち、その三つの角は二直角に等しいということ、その最も大きな角に最も大きな辺が対するということ、及びこれに類することが、論証せられ得ることから明かである。これらの固有性は、たとえば以前に私が三角形を想像したときに

は決して思惟しなかつたにしても、今は  
欲するにせよ欲しないにせよ私の明晰  
に認知するところであり、従つて私によ  
つて構像せられたものではない。

なおまた、私はもちろん三角形の形体  
を有する物体をと きど き見たのである  
からして、この三角形の観念はおそらく

外のものから感覚器官を介して私にや  
つて来たのであろうと言つても、ことが  
らには関係がないのである。なぜなら私  
は、いつか感覚を介して私のうちに忍び  
込んだのではないかという疑いの何ら  
あり得ないところの他の無数の形体を  
考え出すことができ、しかもこれについ

て、三角形についての場合にも劣らず、種々の固有性を論証することができるところから。これらの固有性はすべて、実に私によつて明晰に認識せられるからして、確かに真である、従つてまた或るものでもあり、純粹な無ではない。というのは、すべて真であるものは或るものである



ことは明かであり、また私が明晰に認識するすべてのものは真であることを私は既に十分に論証したのであるから。そしてまたたとい私がこれを論証しなかつたにしても、少くとも私がそれを明晰に知覚する限りは、いずれにせよこのものに同意せざるを得ないということとは、

確かに私の精神の本性である。また私は、私がつねに、これより先、感覚の対象にはなはだしく執着していた時にさえも、この種の真理、すなわち形体とか、数とか、また算術もしくは幾何、あるいは一般に純粹なそして抽象的な数学に属する他のものについて、私が明証的に認知

したところの真理をば、あらゆるものうち最も確實なものと看做したということを想起するのである。

ところで今、もし単に、私が或るものの観念を私の思惟から引き出してくることができるということから、このものに属すると私が明晰かつ判明に知覚す

る一切は、実際にこのものに属するとい  
うことが帰結するとすれば、そこからま  
た神の存在を証明する論証を得ること  
ができないであろうか。確かに私は神の  
観念を、すなわちこの上なく完全な実有  
の観念をば、何らかの形体または数の観  
念に劣らず、私のうちに発見する。また

私は、つねに存在するということが、神の本性に属することをば、或る形体または数について私の論証するものがこの形体または数の本性にまた属すること  
に劣らず、明晰かつ判明に理解する。従  
つて、たとい過ぐる数日私の省察した一  
切が真でなかつたにしても、神の存在は

私のうちにこれまで数学上の真理があったのと少くとも同じ程度の確実性にあるのではなくてはならなかつたであらう。

もつとも、このことはたしかに、一見してはまつたく分明ではなく、かえつて或る詭弁の觀を呈している。なぜなら、

私は他のすべてのものにおいて存在を  
本質から区別することに慣れているゆ  
えに、神の存在もまた神の本質から切り  
離されることができ、そしてかようにし  
て神は存在しないものとして思惟せら  
れることができる、と私は容易に自分を  
説得するからである。しかしながらいつ

そう注意深く考察するとき、神の存在が神の本質から分離せられ得ないことは、三角形の本質からその三つの角の大きさが二直角に等しいということが分離せられ得ず、あるいは山の観念から谷の観念が分離せられ得ないのと同じであることが明白になるのである。それゆえ



に、存在を欠いている（すなわち或る完全性を欠いている）神（すなわちこの上なく完全な実有）を思惟することは、谷を欠いている山を思惟することと同じく、矛盾である。

けれども、私はもちろん谷なしに山を思惟し得ないごとく、存在するものとし

てでなければ神を思惟し得ないにしても、しかし確実に、私が山を谷とともに思惟するということから、だからといって何らかの山が世界のうちに有るということは帰結しないごとく、私が神を存在するものとして思惟するということから、だからといって神が存在するとい

うことは帰結しないと思われるのである。というのは、私の思惟はものに対して何らの必然性をも賦課しないのであるから。また、たといかなる馬も翼を有しないにしても、翼のある馬を想像することができると同じように、たといかなる神も存在しないにしても、私は

たぶん神に対して存在を構像することができるとあるから。

否、詭弁はここにこそ潜んでいる。なぜなら、谷と共にでなければ山を思惟し得ないということからは、どこかに山と谷とが存在するということとは帰結しない、かえってただ、山と谷とは、それ

が存在するにせよ存在しないにせよ、互いに切り離され得ないということが帰結するのみであるが、しかし、存在するものとしてでなければ神を思惟し得ないということからは、存在は神から分離し得ないものであるということ、従つて神は実際に存在するということが帰結

するからである。私の思惟がこれをこのようにするといふわけではない、すなわち何らかのものに或る必然性を賦課するといふわけではない、かえつて反対に、ものそのものの、すなわち神の存在の、必然性が、これをこのように思惟するよ  
うに私を決定するからである。といふの

は、馬をば翼と共にでも翼なしにでも想像することが私にとって自由であるごとく、神をば存在を離れて（すなわちこの上なく完全な実有をば最大の完全性を離れて）思惟することは私にとって自由であるのではないから。

なおまたここに、ひとは次のように言

つてはならぬ、すなわち、神は一切の完全性を有すると私が措定した後においては、存在は実に完全性のうちのひとつであるからして、たしかに神を存在するものとして私が措定すべきことは必然的であるが、しかし第一の措定は必然的なものではなかった、あたかもすべての四



辺形は円に内接すると思えることは必然的ではなく、かえって私がこれをこのように考えると措定すれば、私は必然的に菱形は円に内接すると認めねばならないであろうが、これはしかし明かに偽である、ように、と。なぜというに、たといいつか神について私が思惟するに

至ることは必然的ではないにしても、しかし第一のかつ最高の実有について思惟し、そして彼の観念をいわば私の精神の宝庫から引き出すことが起るたびごとに、私が彼にすべての完全性をば、たといその際私はそのすべてを数え上げず、またその箇々のものに注意しないに

しても、属せしめるべきことは必然的であつて、この必然性はまつたく、後に、存在は完全性であることに私が気づくとき、私をして正当に、第一のかつ最高の実有は存在すると結論せしめるに十分であるからである。これはあたかも、私が何らかの三角形をいつか想像すべ

きことは必然的ではないが、しかし私が単に三つの角を有する直線で囲まれた図形を考察しようとするたびごとくに、私がこの図形に、その二つの角は二直角よりも大きくないということを、たといその際私はまさにこのことに注意しないにしても、正当に推論せしめるところ

のものをば属せしめるべきことは必然的である、のと同様である。しかるに、いったいどのような図形が円に内接せしめられるかを私が考査するときには、すべての四辺形はこれに数えられると私が考えることは決して必然的ではない。否、私が明晰かつ判明に理解するも

のでなければ何もものも認容しようとする  
しなない限りは、私はかかるものを構像す  
ることさえ決してできないのである。従  
って、この種の偽の措定と私に生具する  
真の観念との間には大きな差異がある、  
そして後者の第一のかつ主要なものは  
神の観念である。なぜなら、実に、私は

多くの仕方で、この観念が何か構像せられたもの、私の思惟に依存するもの、ではなく、かえつて真にして不変なる本性のかたどりであることを理解するからである。すなわち、まず第一に、ただ神を除いて、その本質に存在が属するところのいかなる他のものも私によつて考

え出されることができないゆえに。次に、私は二つまたはそれ以上多数のこの種の神を理解することができないゆえに。そして、今かかる神が一つ存在すると措定すれば、彼は永遠からこのかた存在したし、また永遠に向って存続するであろうということが必然的であるのを私は



明かに見るゆえに。そして最後に、私は神のうちに、その何もものも私によつて引き去られることも変ぜられることもできないと、ところの多くの他のものを知覚するゆえに。

しかしともかく、私が結局どのような証明の根拠を使用するにしても、つねに

このこと、すなわちただ私が明晰かつ判明に知覚するもののみが私をまったく説得するということ、に帰著するのである。そしてたしかに、このように私が知覚するもののうち、或るものは何人にも容易にわかるにしても、他のものはしかしいっそう近く観察し注意深く研究す

る者によつてでないと言見せられないが、しかし言見せられた後には、後者も前者に劣らず確實なものと思量せられるのである。例えば、直角三角形において、底边上の正方形は他の二边上の正方形の和に等しいということは、かかる底辺はこの三角形の最も大きな角に対す

るといふことほど容易にわからないにしても、ひとたび洞見せられた後には、後者に劣らず信じられるのである。ところで神について言えば、確かに、もし私  
が先入見によつて蔽われていなかつたならば、そしてもし私の思惟が感覺的なものの像によつてまつたく占められて

いなかつたならば、私は何ものををも、神より先に、またはいつそう容易に、認知しなかつたであらう。なぜなら、最高の実有があるということ、すなわちただそのもののみの本質に存在が属するところの神が存在するということよりも、何がいつそう、おのずから明かであるであ

ろうか。

そして、まさにもこのことを知覚するた  
めに注意深い考察が私に必要なだったと  
はいえ、今や私は単にこのことについて、  
他の最も確實と思われるすべてのこと  
についてと同等に、確かであるのみでな  
く、さらにまた私は余のものの確實性が

まさにこのことに、これを離れては何ものも決して完全に知られ得ないというように、懸っていることに気づくのである。

すなわち、たとい私は、何らかのものを極めて明晰かつ判明に知覚する間は、これを真であると信ぜざるを得ないが

ごとき本性を有するにしても、しかしまた私は、精神の眼をつねに同じものにて、これを明晰に知覚するため、定著し得ないごとき本性をも有するゆえに、しばしば以前に下した判断の記憶が蘇ってくる、そして、どういふわけでそのものをかように私が判断したかの根拠に十



分に注意しないときには、他の根拠が持ち出されることができ、この根拠は私をして、もし私が神を知らなかつたならば、容易に私の意見を捨てさせるであらう、そしてかようにして私は何ものについてもかかつて真にして確實なる知識を有することなく、ただ漠然とした変り易い

意見を有するにすぎないであろう。かよ  
うにして、例えば、私が三角形の本性を  
考察するとき、たしかに私には、もちろ  
ん私は幾何学の原理にいくらか通じて  
いるので、その二つの角が二直角に等し  
いということとは極めて明証的に認めら  
れ、また私は、私がその論証に注意する

間は、このことは真であると信ぜざるを得ないが、しかし私が精神の眼をこの論証から転じるや否や直ちに、たとい私はなおこれを極めて明晰に洞見したこと を想起するにしても、もし実際私が神を知らなかつたならば、このことは真であるかどうかを私が疑うようになるとい

うことは容易に起り得るのである。とい  
うのは私は、私が自然によつて、極めて  
明証的に知覚すると私の考えるものに  
おいて時々過つがごときものとして作  
られているといふことをば、とりわけ後  
になつて他の根拠によつて偽であると  
判断するに至らしめられたところの多

くのものをしばしば真にして確實なるものと看做したということを想起するときには、自分に説得することができから。

しかるに私が神は有ると知覚した後には、——同時にまた私は余のすべてのものが神に懸っていること、また神は欺

瞞者ではないことをも理解し、そしてそ

こから私の明晰にかつ判明に知覚する  
すべてのものは必然的に真であると論  
決したゆえに、——たとい私がどのよう  
なわけでこのことは真であると判断し  
たかの根拠に十分に注意しないにして  
も、ただ単に私がこのことを明晰かつ判

明に洞見したことを想起するならば、私をして疑うようにさせるいかなる反対の根拠も持ち出され得ず、かえって私はこのことについて真にして確實なる知識を有するのである。否、単にこのことについてのみでなく、また私がかつて論証したと記憶するところの余のすべて

のものについて、例えば幾何学に関する  
こと及びこれに類するものについても、  
さうである。というのは、今やいかなる  
反対の根拠が私に対して持ち出される  
であろうか。私がしばしば過つがごとき  
ものとして作られているということでも  
でもあろうか。しかし既に私は、私が分



明に理解するものにおいては過ち得ないことを知っている。それとも私が後になつて偽であるとかわかつたところの多くのものを他の時には真にして確實なるものと看做したということでもあろうか。しかしながら私はかくのごときものの何ものも明晰かつ判明に知覚し

たのではなく、かえって私はおそらく、真理のこの規則を知らなかつたために、後になつてそんなに堅固なものでないことを発見したところの他の原因によつて信じたのである。しからば、ひとはな何を言おうとするか。私はおそらく夢みているのだ（少し前に私が自分に反

対して言ったように)、すなわち、私が  
今思惟するすべてのものは眠っている  
ときに浮んでくるものより以上に真で  
はないのだ、とでも言うであらうか。否  
このこともまた何らことがらを変じな  
い。なぜなら確かに、たとい私は夢みて  
いるにしても、もし何らかのものが私の

悟性に明証的であるならば、このものは  
まったく真であるから。

そしてかようにして私は一切の知識  
の確実性と真理性とがもつぱら真なる  
神の認識に懸っていることを明かに見  
るのである、従つて、私が神を知らな  
かつた以前は、私は他のいかなるものにつ

いても何ものも完全に知ることはできなかつたであらう。しかるに今や私には、一方神そのもの及び他の悟性的なものについて、他方また純粹数学の対象であるところの一切の物体的本性について、無数のものが明かに知られているもの、確實なものであり得るのである。

「#改訂」

## 省察六

物質的なものの存在並びに精神と  
身体との実在的な区別について。

なお残っているのは、物質的なものが存在するかどうかを検討することである。そしてたしかに私は既に少くとも、それが、純粹数学の対象である限りにおいて、存在し得ることを知っている、たしかに私はそれをかかるものとしては明晰かつ判明に知覚するのであるか

ら。なぜなら、神が私のこのように知覚し能うすべてのものを作り出す力を有することは疑われないことであり、また私は、どのようなものでも神によつて、それを私が判明に知覚することは矛盾であるという理由によるほかは、決して作られ得ぬことはない、と判断したから



である。さらに、私が物質的なものにか  
かずらう場合にそれを用いるのを私が  
経験するところの想像の能力からして、  
かかる物質的なものは存在するという  
ことが帰結するようになされる。とい  
うのは、想像力とはいったい何であるか  
をいつそう注意深く考察するとき、それ

認識能力にまざまざと現前するところの、従つて存在するところの物体に対する認識能力の或る適用以外のなにものでもないことがわかるから。

このことが明瞭になるように、私はまず想像力と純粹な悟性作用との間に存する差異を検討する。言うまでもなく、

例えば、私が三角形を想像するとき、私は単にそれが三つの線によつて囲まれた図形であることを理解するのみでなく、同時にまたこれらの三つの線をあたかも精神の眼に現前するもののごとくに直観するのであつて、そしてこれが想像すると私の称するところのものなの

である。しかるにもし私が千角形について思惟しようとするならば、もちろん私は、三角形が三辺から成る図形であることを理解すると同様に、それが千辺から成る図形であることをよく理解するが、しかし私はこの千辺を三辺に比べると同様に想像すること、すなわち、あ

たかも精神の眼に現前するもののごとくに直観することはできないのである。また、たといいそのとき、私が物的なものについて思惟するたびごとに、つねに何ものかを想像する習慣によって、おそらく何らかの図形を不分明に自分のうちに表現するにしても、それがしかし千

角形でないことは明かである。なぜならそれは、もし私が五角形について、あるいは他のどのようなのはなはだ多くの辺を有する図形についてでも、思惟するならば、そのときにまた私が自分のうちに表現する図形と何ら異なるところがないし、またそれは、千角形を他の多角形

から異ならせるところの固有性を認知するに何らの助けともならないからである。しかるにもし問題が五角形についてであるならば、私はたしかにこの図形をば、千角の図形と同じように、想像力の助けなしに理解し得るが、しかしまたこれをば、言うまでもなく精神の眼をそ

の五つの辺に、同時にまたこの辺によつて囲まれた面積に向けることによつて、想像し得るのである。そしてここに私は、想像するためには心の或る特殊の緊張が、すなわち理解するためには私の使わないような緊張が、私に必要であることを明かに認めるのであつて、この心の新



しい緊張は、想像力と純粹な悟性作用との間の差異を明晰に示している。

これに加えるに、私のうちにあるところのこの想像の力は、それが理解の力と異なるに依じて、私自身の本質にとって、言い換えると私の精神の本質にとって必要とせられぬ、と私は考える。なぜな

ら、たといそれが私に存しなくても、疑いもなく私はそれにもかかわらず私が現在あるのと同じのものにとどまるであらうから。そしてそこから、それが私とは別の或るものに懸っているということが帰結するように思われる。しかも、もし何らかの物体が存在していて、精神

がこれをいわば観察するため随意に自己をこれに向け得るといふように、これに精神が結合せられているならば、まさにこのことによつて私が物体的なものに想像するといふことは生じ得ること、従つて、この思惟の仕方が純粹な悟性作用と異なるのはただ、精神は、理解

するときには、或る仕方では自己を自己自身に向わせ、そして精神そのものに内在する観念の或るものを顧るが、しかるに想像するときには、自己を物体に向わせ、そしてそのうちに、自己によって思惟せられた、あるいは感覚によって知覚せられた観念に一致する或るものを直観す

る、ということに存すること、を私は容易に理解する。私は言う、もしたしかに物体が存在するならば、想像力がこのようにして成立し得ることを私は容易に理解する、と。そして想像力を説明するにいかなる他の同等に好都合な仕方にも心に浮ばないゆえに、私は蓋然的にそこ

から、物体は存在する、と推測する。しかしそれは単に蓋然的である。そして、たとい私が厳密にすべてのものを調べても、私の想像力のうちに私が発見するところの物体的本性の判明な観念からしては、何らかの物体が存在することをば必然的に結論するいかなる論拠も取

り出され得ないということを私は見るのである。

しかるに私は、純粹数学の対象であるところのこの物体的本性のほか、どれもこれほど判明にはないが、他の多くものを、例えば、色、音、味、苦痛、及びこれに類するものを、想像するのを

慣わしとしてゐる。そして私はこれらのものをいっそうよく感覚によつて知覚し、これらのものは感覚から記憶の助けを藉りて想像力に達したと思われるゆゑに、これらのものについていっそう適切に論じるためには、同時にまた感覚について論じなければならず、そして私



が感覺と稱するこの思惟の仕方によつて知覺せられるところのものからして、物體的なもの存在を証すべき何らかの確實な論拠を得ることができるかどうかを見なければならぬ。

そしてもちろんまず第一に、私はここで、以前に、感覺によつて知覺せられた

ものとして、真であると私の思ったものはいったい何であるか、またいかなる理由で私はそれをそう思ったのか、を自分に思い起してみよう。次にまた、どういうわけで私はその同じものに後になつて疑いをいれるに至つたかの理由を検討してみよう。そして最後に、現在その

ものについて私は何を信ずべきであるかを考察してみよう。

かようにしてまず第一に私は、私がいわば私の部分あるいはおそらくいわば私の全体とさえ看做したこの身体を構成するところの、頭、手、足、及びその他の器官を有することを感覺した。また

私は、この身体が他の多くの物体の間に  
介在し、これらの物体から、あるいは都  
合好く、あるいは都合悪く、種々の仕方  
で影響せられ得ることを感覚した、そし  
て私はこの都合好いものを或る快樂の  
感覚によつて、また都合悪いものを苦痛  
の感覚によつて量つたのである。なおま

た、苦痛と快樂とのほか、私はまた私のうちに飢、渴、及びこの種の欲望を、同じくまた歎びへの、悲しみへの、怒りへの、或る身体的傾向性及び他のこれに類する情念を感覚した。そして外においては、物体の延長、及び形体、及び運動のほか、私はまた物体において堅さ、熱、

及び他の触覚的性質を感覚した。さらに  
また私は光、及び色、及び香、及び味、  
及び音を感覚し、これらのものの様々の  
変化によつて私は天、地、海、及びその  
他の物体を相互に區別したのである。そ  
して実に、私の思惟に現われたところの  
これらすべての性質の観念——そして

ただこれらの観念のみを私は本来かつ  
直接に感覺したのであるが——によつ  
て見れば、私が私の思惟とはまったく別  
の或るものを、すなわちこれらの観念の  
そこから出てきたところの物体を感覺  
すると考えたのは、理由のないことでは  
なかつた。というのは、私はこれらの観

念が何ら私の同意なしに私にやつてくることを経験した、従つて、もし対象が感覚器官に現前していなかつたならば、私はこれを感じしようと思つても感じし得なかつたし、また現前していたときには、感覚すまいと思つても感覚せざるを得なかつたからである。また、感覚に



よつて知覚せられた観念は、自分であら  
かじめ知つて意識的に省察することに  
おいて私が作り出した観念のどれより  
も、あるいは私の記憶に刻印せられたも  
のとして私が認めた観念のどれよりも、  
遥かに多くの生氣があつて明瞭であり、  
またそれ自身の仕方であつてそう判明で

さえあつたから、これらの観念が私自身から出てくるということはあり得ないように思われた。かようにして、これらの観念は、或る他のものから私にやってきたと考えるほかなかつたのである。そして私はかかるものについて、まさにこれらの観念からのほか、他のどこからも

知識を得なかつたゆえに、かかるものがこれらの観念に類似しているというよりはほかの考えは私の心に浮かび得なかつたのである。なおまた私は、私が以前に理性よりもむしろ感覚を使用したことを想い起したし、また自分で作り出した観念が感覚によつて知覚した観念ほ

ど明瞭なものでなく、そして前者の多くが後者の部分から構成せられていることを見たゆえに、私は、私がまず感覺のうちには有しなかつたところのいかなる觀念も私はまったく悟性のうちに有しないということをば、容易に自分に説得したのである。さらにまた、私が或る特

殊の権利をもつて私のものと称したところのこの身体は他のいずれの物体よりもいっそう多く私に属すると私が信じたのは理由のないことではなかった。なぜというに、私は身体からは、その他の物体からのように、決して切り離され得なかつたし、また私はすべての欲望や

情念を身体のうちにかつ身体のために  
感覚したし、そして最後に私は苦痛及び  
快樂のくすぐりを身体の部分において、  
身体の外に横たわる他の物体において  
ではなく、認めたからである。しかし何  
故に、この何か知らない苦痛の感覚から  
心の或る悲しみが生じてくるのか、また

快いくすぐりの感覚から或る悦びが生じてくるのか、あるいは何故に、私が飢えと呼ぶこの何か知らない腹部のいらだちは私に食物を取ることについて忠告し、咽喉の乾きはしかし飲むことについて忠告するのか、その他これに類することが生じるのは何故であるかについて

ては、私は自然によつてこのように教えられたからという以外、実に私は他の説明を有しなかつた。なぜなら、腹部のいらだちと食物を取ろうとする意志との間には、あるいは苦痛をもたらすもの、感覚と、この感覚から出てきた悲しみの意識との間には、いかなる類同も（少く



とも私の理解し得たような類同は)まっ  
たく存しないからである。むしろ、私が  
感覚の対象について判断したその他の  
一切のこともまた、自然によつて教えら  
れたように思われたのである。というの  
は、私は、それら一切のことが私の判断  
したごとくであるということをば、まさ

にこのことを証明する何らかの根拠を  
考量するよりも前に、自分に説得したの  
であるから。

しかるにその後多くの経験が、次第次  
第に、感覚に対して私の有したすべての  
信頼を毀していった。なぜなら、時々、  
遠くからは円いものと思われた塔が、近

くでは四角なものであることが明かになつたことがあつたし、またこれらの塔の頂に据えられた非常に大きな彫像が、地上から眺めるときには大きなものと思われなかつたことがあつた、そして私  
はかくのごとき他の無数のものにおいて外的感覺の判断が過つことを見つ

たから。単に外的感覚の判断のみではな  
い、また内的感覚の判断もそうであつた。  
なぜなら、何が苦痛よりもいつそう内部  
的であり得るだろうか、しかも私はかつ  
て、脚あるいは腕を切断した人々から、  
自分ではまだ時々この失くした身体の  
部分において苦痛を感じるように思わ

れるということを知った、従ってまた、私においても、私が身体の或る部分において苦痛を感じるとしても、その部分に私に苦痛を与えるということとは、まったく確実ではないように思われたから。これらの上にまた私は最近二つの極めて一般的な疑いの原因を加えたのである。

その第一のものは、私の醒めているときに私が感覺すると信じたもので、眠っている間にまたいつか私が感覺すると考へ得ないものは決してなく、そして私が睡眠中に感覺すると思われるものは、私の外に横たわるものから私にやつてくると私は信じないゆえに、どうしてこの

ことをむしろ私の醒めているときに感  
覚すると思われるものについて私が信  
じるのであるか、私にはわからなかつた  
ということであつた。もう一つの疑いの  
原因は、私は私の起原の作者をこれまで  
知らなかつたゆえに、あるいは少くとも  
知らないと仮定したゆえに、私に極めて

真なるものと見えたものにおいてさえ過つというように私が本性上作られているということをば、いかなるものも妨げるものを私は見なかつたということであつた。そして以前に私が感覺的なものの真理を説得させられたところの理由についていえば、これに対して答える



ことは困難でなかった。というのは、理性が制止した多くのものに私は自然によつて駆り立てられるように思われたので、自然によつて教えられるものに多く信頼すべきではないと私は考えたから。またたとい感覚の知覚は私の意志に懸っていないとしても、だからといって

それが私とは別のものから出てくると結論すべきではないと私は考えたから。なぜならおそらく、私にはまだ認識せられていないとはいえ、私自身のうちにはかかる知覚を作り出すものとして何らかの能力があるかもしれないからである。

しかしながら今、私は私自身並びに私の起原の作者をいつそうよく知り始めるに至って、感覚によつて得ると思われ  
るすべてのものは、もちろん軽々しく容  
認せらるべきではないが、しかしまたそ  
のすべてのものに疑いをいれるべきで  
もない、と私は考えるのである。

そしてまず第一に、私が明晰かつ判明に理解するすべてのものは、私が理解する通りのものとして神によつて作られる得ることを私は知っているからして、或る一つのものが他のものと異なることが私に確實であるためには、私がその一つのものをば他のものを離れて明晰か

つ判明に理解し得るといふことで十分である。なぜならそのものは少くとも神によつて分離して措定せられることができるから。それに、そのものが異なるものと思量せられるためには、いかなる力によつてかく分離して措定せられるといふことが生ずるかは、問題にならな

い。かようにして、まさにこのこと、すなわち、私は存在することを私が知っているということ、しかも、私は思惟するものであるということのみのほか他の何ものもまったく私の本性すなわち私の本質に属しないことに私が気づいているということから、私の本質はこの一

つのこと、すなわち私は思惟するものであるといふことに存することを、私は正當に結論するのである。そしてたとい私はたぶん（あるいはむしろ、すぐ後に言う通り、確かに）私と極めて密接に結合せられているところの身体を有するにしても、しかし一方では、私が延長を有

するものではなくてただ思惟するものである限りにおいて、私は私自身の明晰で判明な観念を有し、そして他方では、物体が思惟するものではなくてただ延長を有するものである限りにおいて、私は物体の判明な観念を有するゆえに、私が私の身体から実際に区別せられたも



のであるということ、そして私がこの身体なしに存在し得るということは、確かである。

なおまた私は私のうちに思惟の仕方における或る特殊な能力、すなわち想像の能力や感覚の能力を発見するが、私はこれらの能力なしに全体としての私を

明晰かつ判明に理解することができ、  
に反し、逆にこれらの能力は私なしには、  
言い換えるとこれらの能力がそのうち  
に内在する思惟的実体なしには理解せ  
られることができない。なぜなら、これ  
らの能力は自己の形相的概念のうち  
或る悟性作用を含み、そこから私は、あ

たかも様態が物から区別せられている  
ごとく、これらの能力が私から区別せら  
れていることを知覚するからである。さ  
らにまた私は或る他の能力、例えば場所  
を變じる能力、種々の形体をとる能力、  
その他これに類するものを認知するが、  
これらの能力もたしかに、前のものと同

じく、これらの能力がそのうちに内在する或る実体を離れては理解せられることができず、従つてまたこの実体を離れては存在することができない。むしろこれらの能力が、もしたしかに存在するならば、物的実体すなわち延長を有する実体に、しかし思惟的実体にはなく、

内在しなくてはならぬということとは明瞭である。なぜなら、これらの能力の明晰で判明な概念のうちには、もちろん或る延長が含まれるが、しかしいかなる悟性作用もまいったく含まれないからである。しかるに今たしかに私のうちには感覺する或る受動的な能力、すなわち感覺

的なものの観念を受取り認識する能力があるが、しかし私はこれをば、もし私のうちに、あるいは他のものの中に、或る能動的な、かかる観念を生産するあるいは実現する能力がまた存在しなかつたならば、何ら用い得なかつたであろう。しかもこの能動的な能力は実に私自

身のうちに存することができない。なぜなら、それはいかなる悟性作用をもまったく予想しないし、またかかる観念は私が協力することなしに、かえつてしばしば私の意志に反してさえ生産せられるから。ゆえにそれは私とは別の或る実体のうちに存すると考えるほかはない。そ

してこの実体のうちには（既に上に注意したごとく）この能力によつて生産せられた觀念のうちには客觀的に有る一切の實在性が形相的にか優越的にか内在しなくてはならないからして、この実体は物体、すなわちもちろんかかる觀念が客觀的に含む一切のものを形相的に含む



ところの物体的本性であるか、それとも神そのものであるか、それともかかる一切のものを優越的に含むところの、物体よりも高貴な或る被造物であるかである。しかるに、神は欺瞞者でないゆえに、神がかかる観念を、直接に自己自身によつて私に伝えるのではないこと、またか

かる觀念の客觀的實在性をば形相的に  
ではなく単に優越的に含むところの或  
る被造物の媒介によつて私に伝えるの  
でもないことは、まづたく明白である。  
なぜなら、神はこれがそのような被造物  
の媒介によるのであると認知するいか  
なる能力をもまづたく私に与えなかつ

たし、かえつて反対にかかる観念が物体的なものから発すると信じる大きな傾向性を私に与えたのであるから、もしかかる観念が物体的なものからよりほかの他のところから発したとしたならば、どういうわけで神が欺瞞者でないことが理解せられ得るのか私にはわからな

いからである。従つて、物体的なものは存在する。しかしおそらくそのすべてはまったく私がそれを感覺によつて把握するがごときものとして存在するのではなからう、この感覺の把握は多くの場合極めて不明瞭であり不分明であるから。しかしながら少くともそのうちにお

いて私が明晰かつ判明に理解する一切のもの、言い換えると、一般的に見るならば、純粹数学の対象のうちに包括せられる一切のものは、実際に有るのである。しかるにその余のものについていえば、それらのものは、例えば、太陽はかくかくの大きさまたは形体のものである

る、等々のごとく、単に特殊なもの  
あるか、それとも、例えば、光、音、苦  
痛、及びこれに類するもののごとく、  
より少く明晰に理解せられたものであ  
るかであるが、たといそれらのものは極  
めて疑わしい不確実なものであるにし  
ても、しかもまさにこのこと、すなわち、

神は欺瞞者ではないということ、従つてまた私の意見のうちにはいかなる虚偽も、これを訂正する或る能力がまた私のうちに神によつて賦与せられている場合のほかは、見出されることがあり得ないということ、それらのものにおいてもまた真理に達し得る確実な希望を私

に示すのである。そして実に自然によつて教えられるすべてのものが何らかの真理を有するはずであるということとは疑い得ないことである。なぜなら、私がいま一般的に見られた自然というのは、神そのものの、それとも神によつて制定せられたところの被造物の整序以外の何



物でもなく、また特殊的に私の自然というのは、神によつて私に賦与せられたすべてのものの集合体以外のものではないからである。

ところで、私が身体を有すること、すなわち、私が苦痛を感覚するときにはその具合が悪く、そして私が飢えまたは渴

きに悩むときには食物あるいは飲料を必要とし、等々といった、身体を有することよりもいっそう明白にこの自然が私に教えることは何もない。従つてまたこのことのうちに或る真理が存することを私は疑うべきではないのである。

また自然はこれら苦痛、飢え、渴き、

等々の感覚によつて、あたかも水夫が船のなかにいるごとく私が単に私の身体  
のなかにいるのみでなく、かえつて私が  
この身体と極めて密接に結合せられ、そ  
していわば混合せられていて、かくてこ  
れと或る一体を成していることを教え  
るのである。というのは、もしそうでな

いとすれば、身体が傷つけられるとき、私すなわち思惟するもの以外の何物でもない私は、そのために苦痛を感じないはずであり、かえってあたかも水夫が船のなかで何かが毀れるならば視覚によつてこれを知覚するごとく、私はこの負傷を純粹な悟性によつて知覚するはず

であり、また身体が食物あるいは飲料を必要とするとき、私は單純にこのことを明白に理解し、飢えや渴きの不分明な感覺を有しないはずであるからである。なぜなら確かに、これら渴き、飢え、苦痛、等々の感覺は、精神と身体との結合と、いわば混合とから生じた或る不分明な

思惟の仕方にはかならないから。

さらにまた私は自然によつて、私の身体のみならず、その或るものは私にとつて追い求むべきものであり、或るものは避け逃るべきものであるところの、他の種々異なる物体が存在することを教えられる。そして確かに、私が極めて異な

る色、音、香、味、熱、堅さ、及びこれに類するものを感覺するということから、私は、これら種々に異なる感覺の知覚がそこからやつてくる物体のうちには、これらの知覚にたといおそらく類似していないにしても対応している或る異種性が存する、と正当に結論するのであ

る。なおまた、かかる知覚のうち或るものは私にとって快適であり、或るものは不快であるということから、私の身体が、あるいはむしろ、私が身体と精神とから成っている限りにおいて、全体としての私が、そのまわりを取り繞っている物体によつて、あるいは都合好く、あるいは



都合悪く、種々異なる仕方では影響せられ得るといふことは、まづたく確かである。

しかしながら、自然が私に教えたもののように見えても、実際は自然からではなく、かえつて無思慮に判断する或る習慣から私が受取つた他の多くのものがある、従つて容易にこれらのものは偽で

あることが生じ得る。すなわち、その中には私の感覚に影響を与える何もものもまったく現われぬ一切の空間は真空であるとする事、また、例えば、熱い物体のうちには私のうちにある熱の觀念にまったく類似する或るものがあり、白い物体または緑の物体のうちには私

の感覺するのと同じ白または緑があり、  
苦い物体または甘い物体のうちにはこ  
れと同じ味があり、その他の場合にも同  
様のことがあるとすること、また、星や  
塔、その他何でも遠く離れた物体は単に  
私の感覺に現われるのと同じ大きさや  
形体のものであるとすること、その他こ

の種のこと、それが、それである。しかるに、これらのことがらにおいて私が十分に判明に知覚しない何もものもないようにするためには、私が或ることを自然によつて教えられるとき、何を本来意味するかをいっそう厳密に定義しなくてはならぬ。すなわち私はここに自然を

ば、神によつて私に賦与せられたすべて  
のものゝの集合体という意味よりもいつ  
そう狭い意味に解する。というのは、こ  
の集合体のうちにはただ精神のみに属  
する多くのもの、例えは、為されたこと  
は為されなかつたことであることがで  
きぬと私が知覚すること、及びその他、

自然的な光によつて知られているすべてのものが、含まれるが、これらについてはここでは言及しないし、またそのうちにはさらに、ただ物体のみに関する多くのもの、例えば、物体は下に向うということ、及びこれに類すること、が含まれるが、これらについてもまたここでは

問題でなく、かえつてただ、精神と身体  
とからの合成体としての私に、神によつ  
て賦与せられたものののみが問題なので  
あるからである。従つてまた、この自然  
はたしかに、苦痛の感覚をもたらすもの  
を避け逃れ、そして快樂の感覚をもたら  
すものを追い求むること、及びかかる性

質のことを教えるが、しかしこの自然がその上になお、これらの感覚の知覚から、悟性のあらかじめの考査なしに、我々の外に横たわるものについて何かを結論することを我々に教えるということとは明かではないのである、なぜなら、かかるものについて真を知るということは



ただ精神のみに属し、合成体には属しないように思われるから。かようにして、たとい星は私の眼を小さい松明の火よりもいっそう多くは刺戟しないにしても、かかる合成体としての私のうちにはしかし星がこの火よりも大きくないと信ぜしめる何らの実在的なあるいは積

極的な傾向性も存せず、かえつて私は根拠なしに若い時分からこのように判断したのである。また、たとい火に近づく  
と私は熱を感覚し、そして余りに近くそれ  
に近づくると私は苦痛を感覚しさえす  
るにしても、実際、火のうちにはこの熱  
に類似する或るものがあると、またこの

苦痛に類似する或るものがあると、私に説得する何らの根拠も存せず、かえつてただ、火のうちには我々においてこれらの熱あるいは苦痛の感覚を喚び起す或るもの——それが結局どのようなものである——があるということを私に説得する根拠が存するに過ぎない

のである。さらに、たとひまた或る空間のうち、感覚に影響を与える何物も存しないにしても、だからといってこの空間のうちには何らの物体も存しないと、かえって私は、私がかゝる場合に、また他の非常に多くの場合に、自然の秩序を歪曲するのを慣わし

とすることを見るのである。なぜなら実  
に、感覚の知覚は本来ただ精神に、精神  
がその部分であるところの合成体にと  
っていったい何が都合好いものあるい  
は都合悪いものであるかを指示するた  
めに、自然によつて与えられており、そ  
してその限りにおいて十分に明晰で判

明であるが、私はこの知覚をあたかも我々の外に横たわる物体の本質がいつたい何であるかを直接に弁知するため  
の確実な規則であるかのように使用する  
るのであつて、かかる本質についてはし  
かるにこの知覚は極めて不明瞭にそし  
て不分明にでなければ何物も指示しな

いからである。

ところで既に前に私は、どういいうわけ  
で、神の善意にもかかわらず、私の判断  
の偽であることが生ずるのかという理  
由を十分に洞見した。しかしながらここ  
に、あたかも追い求むべきものあるいは  
避け逃るべきもののように自然によつ

て私に示されるものそのものに関して、さらにまた私がそのうちにおいて誤謬を発見したと思われる内部感覚に関して、新しい困難が現われる。例えば、ひとが或る食物の快い味に欺かれて、中に隠されている毒をも一緒に取る場合のごときがそれである。しかしもちろん、



この場合、彼はただそのうちに快い味が  
存するものを欲求するようにならざるに  
よって驅り立てられるのであつて、彼がま  
つたく知らない毒を欲求するようになら  
ずして立てられるのではない。かくてここか  
ら結論せられ得ることは、この自然は全  
智ではないということ以外の何物でも

ないのである。そしてこれは驚くべきことではない、なぜなら、人間は制限せられたものであるゆえに、彼には制限せられた完全性しかふさわしくないから。

しかし実に我々が自然によつて駆り立てられるものにおいてさえも我々が過つことは稀ではない。例え、病気で

ある人々がすぐ後に自分に害をなすべ  
き飲料あるいは食物を欲求する場合の  
ごときがそれである。この場合たぶん、  
彼等は彼等の自然が頽廃しているため  
に過つのである、と言われることができ  
るであろう。しかしながらこれは困難を  
除くものではない。なぜなら、病氣の人

間は健康な人間に劣らず真実に神の被造物であり、従つてまた前者が神から欺くところの自然を授けられているといふことは後者がそうであるといふことに劣らず矛盾であると思われるから。そして歯車と錘とから出来ている時計が、悪く作られていて時刻を正しく示さな

いときにも、あらゆる点で製作者の願いを満足させるときに劣らず正確に、自然のすべての法則を遵守するように、そのようにまた、もし私が人間の身体をば、骨、神経、筋肉、脈官、血液及び皮膚から、たといそのうちに何ら精神が存在しなくともなお、現在そのうちに、意志の

命令によつてではなく、従つて精神によつてではなく、行われているのと同じすべての運動を有するようにな、調整せられ合成せられているところの或る種の機械として見るならば、この身体にとつて、もし、例えば、水腫病を患っているならば、かの精神に渴きの感覚をもたらずの

をつねとするのと同じ咽喉の乾きに悩み、そしてまたこの乾きによってその精神及びその他の部分が、病気を重くすることになる飲料をとるように、配置せられるということは、この身体のうちには何らかかる欠陥が存しないときに、咽喉の同様の乾きによって自分に有益な飲料

をとるように動かされるといふことと等しく、おそらく自然的であるのを、私は容易に認めるのである。そしてたとい、時計のあらかじめ意図せられた用途を顧るならば、時刻を正しく示さないときには、それは自己の自然からそれていると言ふことができるにしても、また同じ



ように、人間の身体の機械をあたかもそのうちにおいて生ずるのをつねとする運動のために調整せられたもののごとくに見るならば、もし、飲料が身体そのものの保存に役立たないときに、その咽喉が乾いているとすれば、それはまた自己の自然からはずれていると考えるに

しても、しかし私は自然のこの後の意味が前の意味とははなはだ異なることに十分に気づくのである。なぜなら、後の意味での自然は、病気の人間や悪く作られた時計を健康な人間の観念や正しく作られた時計の観念と比較する私の思惟に依存するところの規定以外の何物

でもなく、そしてそれは、それについて語られるものに対して外面的な規定であり、しかるに前の意味においては、自然というものは、実際にもののうちに見出される或るもの、従つて或る真理を有するあるものであるからである。

しかしながら確かに、水腫病を患つて

いる身体について見るならば、飲料を必要としないのに渴いた咽喉を有するということから、その自然は頽廢していると言われるとき、それは単に外面的な規定であるにしても、しかし合成体、すなわちかかる身体と合一せる精神について見るならば、飲料が自分に害をするで

あろうときに渴くということとは、単なる規定ではなく、かえつて自然の真の誤謬である。従つてここに追求すべく残つてゐるのは、いかにして神の善意はかように解せられた自然が欺くものであることを妨げないのであるか、ということである。

ところで私はここにまず第一に、精神と身体との間には、身体は自己の本性上つねに可分的であり、しかるに精神はまったく不可分的であるという点において、大きな差異が存することを認めるのである。というのは実に、私が後者、すなわち単に思惟するものである限りに

おける私自身を考察するとき、私は私のうちに何らの部分をも區別することができず、かえつて私は私がまったく一にして全体的なものであることを理解するからである。そしてたとい全体の精神が全体の身体に結合せられているかのやうに思われるにせよ、しかし足、ある

いは腕、あるいはどのような他の身体の部分を切り離しても、私はそのために何物も精神から取り去られていないことを認識する。なおまた意欲の能力、感覚の能力、理解の能力、等々は、精神の部分と言われることができない、なぜなら、意欲し、感覚し、理解するのは一にして



同じ精神であるから。しかるにこれに反して、私が思惟によつて容易に部分に分割し、そしてまさにこれによつてそれが可分的であることを私の理解しないよ  
うな物體的ないかなるものも、すなわち延長を有するものも私によつて思惟せられることができないのである。この一

事は、精神が身体とはまったく異なつて  
いることをば、もしまだ私がこのことを  
他のところから十分に知らないならば、  
私に教えるに足りるであらう。

次に私は、精神が身体のすべての部分  
からではなく、ただ脳髓から、あるいは  
おそらくそれのみでなく単に一つの極

めて小さい部分、すなわちそこに共通感  
覚が存すると言われる部分から、直接に  
影響せられるということ、認めるので  
ある。この部分は、ここで数え上げるこ  
とを要しない無数の経験の証明するご  
とく、それが同じ仕方で配置せられると  
きはつねに、たといその間に身体のもの

他の部分は種々異なる状態にあることが  
できるにしても、精神に同一のものを  
示すのである。

さらに私は、物体のいかなる部分も他  
のなにほどこか遠く隔っている部分によ  
って、たといこのいつそう遠く隔ってい  
る部分が何ら動かないにしても、その間

に横たわっている部分のうち、何らかのものによつてまた同じ仕方で動かされ得るのでないと、動かされ得ないといふことが、物体の本性であるのを認めるのである。すなわち、例えば、 $A \cdot B \cdot C \cdot D$ なる綱において、その最後の部分  $D$  が引かれる場合、最初の部分  $A$  は、最

後の部分Dが動かないままに止まつていて中間の部分のうちの一つBあるいはCが引かれた場合にまたそれが動かされ得るのと別の仕方では動かせないであろう。これと同様の理由によつて、私が足の苦痛を感ずる場合、自然学は私に、この感ずるは足を通じて伝はつてい

る神経の助けによつて生ずるのであつて、この神経は、そこから脳髓へ連続的に綱のごとくに延びていて、足のところで引かれるときには、その延びている先の脳髓の内部の部分をまた引き、このうちにおいて、精神をして苦痛をばあたかもそれが足に存在するものであるかの

ごとくに感覺せしめるように自然によつて定められているところの或る一定の運動を惹き起すのである、ということをお教えるのである。しかるにこれらの神経は、足から脳髓に達するためには、脛、腿、腰、脊及び頸を經由しなくてはならぬゆえに、たといこれらの神経の足のう



ちにある部分が触れられなくて、ただ中間の部分の或るものが触れられても、脳髄においては足が傷を受けたときに生ずるのとまったく同じ運動が生じ、そこから必然的に精神は足においてそれが傷を受けたときと同じ苦痛を感覚するということが起こり得るのである。そし

て同じことが他のどのどのような感覚についても考えられねばならない。

最後に私は、直接に精神に影響を与えるところの脳髓の部分において生ずる運動のおのおのは、精神に或る一定の感覚しかもたらさないのであるからして、この場合、この運動が、それのもたらし

得るあらゆる感覚のうち、健康な人間の保存に最も多くかつ最もしばしば役立つところのものをもたらすということよりもいつそう善いかなることとも考へ出され得ないということ認めるのである。しかるに経験は自然によつて我々に賦与せられたすべての感覚がか

くのごとき性質のものであることを証している。従つてそのうちには神の力並びに善意を証しない何物もまつたく見出されないのである。かようにして、例えば、足のうちにある神経が激しくそして通例に反して動かされるとき、その運動は、脊髄を経て脳髄の内部の部分に達

し、そこにおいて精神に或るものを、すなわち苦痛を、あたかも足に存在するもののごとくに、感覺せしめるところの場合を与え、これによつて精神は苦痛の原因をば足に害をするものとして自分に行きだけ取り除くように刺戟せられるのである。もつとも、人間の本性は、

この脳髓における同じ運動が精神に何か他のものを示すように、すなわちあるいはこの運動そのものを、脳髓にある限りにおいて、あるいは足にある限りにおいて、あるいは両者の中間の場所のうちどこかにある限りにおいて、示すように、あるいは最後に何かもつと他のものに、

を示すように、神によつて仕組まれるこ  
とができたであらう。しかしながらこれ  
らの他のいずれのものも身体の保存に  
右にいったものと同等に役立たなかつ  
たであらう。同じように、我々が飲料を  
必要とするとき、これによつて或る種の  
乾きが咽喉に起り、その神経を動かし、

そしてこの神経を介して脳髓の内部を動かす、そしてこの運動は精神に渴きの感覚を生ぜしめる。なぜなら、この全体のことからにおいて、健康状態の維持のためには我々は飲料を必要とすることを知るということよりも、我々にとっていつそう有用なことは何もないのである。



るから。そしてその他の場合についても同様である。

これらのことから、神の廣大無辺なる善意にもかかわらず、精神と身体とから合成せられたものとしての人間の本性が、時には欺くものであらざるを得ないことは、まったく明白である。というの

は、もし或る原因が、足においてではなく、神経が足からそこを経て脳髄へ拡がっている部分のうちのどこかにおいて、あるいは脳髄そのものにおいてさえも、足が傷を受けたときに惹き起されるのを常とするのとまったく同じ運動を惹き起すならば、苦痛はあたかも足にある

もののごとくに感覺せられ、かくして感覺は自然的に欺かれるから。なぜなら、

この脳髓における同じ運動はつねに同じ感覺をしか精神にもたらすことができず、そしてこの運動は他のところに存在する他の原因によつてよりも足を傷つける原因によつて遙かにしばしば惹

き起されるのをつねとするゆえに、この運動が他の部分の苦痛よりもむしろ足の苦痛を精神につねに示すということ、は、理に適ったことであるからである。またもし時に咽喉の乾きが、通例のごとく身体の健康に飲料が役立つということからではなく、かえって水腫病におい

て起るごとく、或る反対の原因から惹き起されるならば、それがこの場合に欺くということとは、反対に身体が健全な状態にあるときにつねに欺くということよりも、遥かにいつそう善いことである。そしてその他の場合についても同様である。

ところでこの考察は、単に私の本性が陥り易いすべての誤謬に気づくためにのみでなく、またこれらの誤謬を容易に匡ただしあるいは避け得るために、はなはだ多くの貢献をするのである。なぜなら実に、私はすべての感覚が身体の利益に関することがらについて偽より

も真を遥かにしばしば指示することを  
知っているし、また私は或る同じものを  
検査するためにはほとんどつねにこれら  
の感覚の多くを使用することができ  
し、そしてその上に、現在のものを先行  
のものと結合するところの記憶や、すで  
に誤謬のすべての原因を洞見したとこ

ろの悟性をも使用することができるか  
らして、もはや私は毎日感覚によつて私  
に示されるものが偽でありはしないか  
と恐れることを要せず、かえつて過ぐる  
日の数々の誇張的な懷疑は、笑に値する  
ものとして、追ひ払わるべきものである  
からである。これはとりわけ私が覚醒か



ら区別しなかつたところの夢について  
の極めて一般的な懷疑がそうである。と  
いうのは、私は今、両者の間には、夢に  
現われるものは決して、醒めているとき  
に起るもののように、生涯の余のすべて  
の活動と記憶によつて結び附けられな  
いという点において、非常に大きな差別

があることを認めるからである。なぜなら実際に、もし何者かが、私の醒めているときに、夢において起るごとく突然に私に現われ、そしてすぐ後に消え失せ、かくしてもちろんこの者がどこから来たのかもどこへ去ったのかもわからなかったならば、私がこの者を真実の人間で

あると判断するよりもむしろ幽霊、または私の脳裡で作られた幻想であると判断するのは、不当ではないであろうから。しかしながら、それがどこから来たか、どこにあるかという場所、またそれがいつ私にやってきたかという時間を私が判明に認めるところの、そしてそれにつ

いての知覚を何らの中断もなしに全生涯の他の時期と私が結び附けるところのものが起るときには、それが夢においてではなく、醒めているときに起つてゐることは、私にまったく確實である。またかかるものの真理について私は、もし、それを検査するためにはすべての感覚、記

憶及び悟性を召喚した後に、そのうちの  
いずれによつてもその他のものと矛盾  
するいかなることも私に知らされない  
ならば、わずかなりとも疑うことを要し  
ないのである。なぜなら、神は欺くもの  
ではないといふことから、かかるものに  
おいて私は過たないといふことが一般

に帰結するからである。しかしながら行動の必要はつねにかように厳密な検査の余裕を与えないゆえに、人間の生活は特殊的なものに関してしばしば誤謬に陥り易いことを告白しなければならず、そして我々の本性の弱さを承認しなければならぬのである。

「#改訂」

幾何学的な仕方で配列された、

神の存在及び靈魂と肉体と

の區別を証明する諸根拠

## 定義

一 思惟〔#「思惟」に傍点〕(cogitatio)  
という語によつて私は、我々がそれを直接に意識しているというふうには我々のうちにあらゆるものを包括する。かくして意志、悟性、想像力、及び感覚のすべて



ての働きは、思惟である。しかし私は、思惟から帰結されてくるものを除外せ  
んがために、直接に「#「直接に」に傍  
点」(immediate) という語を付け加え  
た。例えば、有意運動はたしかに思惟を  
原理として有するが、それ自身はしかし  
思惟ではない。

## 二 観念「#「観念」に傍点」(idea)

という語によつて私は、その直接の知覚によつて私がその同じ思惟自身を意識している、おのおのの思惟の形相(forma)を理解する。かくてすなわち私は、私が言うところのものを私が理解しているとき、まさにこのことからその言葉によ

つて表わされたものの観念が私のうちにあることが確かであるのでなくては、言葉によつて何もものも表現することができないのである。そしてかようにして私は想像のうち描かれた単なる像を観念と呼ぶのではない、否、私はここにかかるものを、それが身体的な想像の

うちに、言い換えると脳の或る部分のうち  
ちに描かれている限りにおいては、決して  
観念とは呼ばず、ただそれが脳のその  
部分に向けられた精神そのものを形作  
る限りにおいて、観念と呼ぶのである。

三 観念の客観的実在性「#」観念の  
客観的実在性」に傍点」(realitas

objectiva ideae) ということによつて私

は觀念によつて表現されたものの実有性 (entitas) を、それが觀念のうちにある限りにおいて、理解する。そして同じ仕方で、客觀的完全性、あるいは客觀的技巧、等々、と言われることができる。

というのは、觀念の対象のうちにあるも

ののように我々が知覚するあらゆるものは、観念そのもののうちに客観的にあるのであるから。

四 同じものは、それが観念の対象のうち、我々がそれを知覚する通りに現われている場合、観念の対象のうちに形相的に「# 「形相的に」 に傍点」

(formaliter) あると言われる。また、その通りにではないが、かえってこれを補うことができるとほど大きなものである場合、優越的に「# 「優越的に」に傍点」(eminenter) あると言われる。

五 我々が知覚する或るもの、言い換えると、その実在的な観念が我々のうち

にある或る固有性、あるいは性質、あるいは属性が、それのうちに直接に内在する基体 (*subjectum*)、あるいはそれらが存在せしめるあらゆるもの (*res*) は、実体「#「実体」に傍点」 (*substantia*) と呼ばれる。また厳密な意味における実体そのものについて我々は次のごとき



觀念しか有しない。すなわち、実体とは、我々が知覚するところの或るものが、つまり我々の觀念のいずれかのうちに客觀的にあるものが、そのうちでは形相的に、もしくは優越的に存在するところのものである。無は何ら実在的な属性を有し得ないことは、自然的な光によつて知

られているゆえに。

六 思惟がそれに直接に内在する実体は精神「# 精神」に傍点」(mens) と呼ばれる。私はここで靈魂 (anima) というよりもむしろ精神と言う。靈魂といふ語は両義的であつて、しばしば物体的なものに適用されるからである。

七 場所的延長及び延長を前提する

偶有性、例えば形体、位置、場所的運動、などの直接の基体である実体は、物体 (corpus) と呼ばれる。しかし精神及び物体と呼ばれるものが、一つの同じ実体であるか、それとも二つの相異なる実体であるかは、後に攷究しなければならな

いであろう。

八 この上なく完全であると我々が理解し、そしてそのうちに何らかの欠損あるいは完全性の制限を含む何ものもまったく我々が把捉しない実体は、神

【#「神」に傍点】(Deus)と呼ばれる。

九 或るものが何らかのものの本性

あるいは概念のうちに含まれると、我々が言うとき、そのものがこのものについて真であると、あるいはこのものについて肯定され得ると、言うのと同じである。

一〇 その一が他を離れて存在し得るとき、二つの実体は実在的に区別されると言われる。

## 要請

第一に「#「第一に」に傍点」、私は、  
読者が自分の感覚をこれまで信用した  
根拠がいかに薄弱なものであるか、また  
その上に築いたすべての判断がいかに

不確實なものであるかに注意せられるように、そしてこのことを長い間またしばしば自分の心に思いめぐらし、かくて遂に自分の感覚にもはやあまり多く信頼しない習慣を得られるやうに、要請する。というのはこれは形而上学に関する事がらの確實性を知覚するため必要

であると私は判断するから。

第二に「#「第二に」に傍点」、私は、  
読者が自分自身の精神並びにその全体  
の属性を考察せられるように、要請する、  
これらについては、たとい自分の感覚に  
よってかつて受取ったすべてのものが  
偽であると仮定しても、疑うことができ



ないことを認められるであらう。そして私は、読者が精神を明晰に知覚し、そしてそれがすべての物体的なものよりも認識するにいつそう容易であると信じ、習慣を得るまでは、精神を考察することを止められないように、要請する。

第三に「#「第三に」に傍点」、それ

自身によつて知られ、読者が自分において発見するところの命題、例えば、同じものは同時に有ると共にあらぬことはできぬ「#」同じものは同時に有ると共にあらぬことはできぬ「に傍点」、また、無はいかなるものの動力因であることも不可能である「#」無はいかなるもの

の動力因であることも不可能である」に  
傍点」、及びこれに類する命題を、注意  
深く考量し、そしてかようにして自然に  
よつて自分に賦与されている、しかし感  
覚の表象が極めてはなはだしく混乱さ  
せ不分明にするのをつねとするところ  
の悟性の明瞭さを、純粹に、感覺から解

放して、使用するように、私は要請する。  
なぜならかような仕方では読者にとって  
後述の諸公理の真理は容易に明かにな  
るであろうから。

第四に「#「第四に」に傍点」、私は、  
読者がそのうちには多くの同時に有す  
る属性の複合が含まれるところの本性的

の観念を検討するように、要請する、すなわち、三角形の本性、正方形のあるいは何か他の図形の本性、さらにまた精神の本性、物体の本性、そして何よりも神あるいはこの上なく完全な実有の本性にかかる性質のものである。そして読者が、かかる本性のうちに含まれることを

我々が知覚するところのすべてのものは、実際にそれらのものについて肯定せられ得ることに注意するように、私は要請する。例えば、三角形の本性のうちにはその三つの角は二直形に等しいといふことが含まれ、また物体すなわち延長を有するもののうちには可分性が（とい

うのはそれを少くとも思惟によつて分割し得ないほど小さな延長を有するものを我々は何ら考え得ないから）含まれるゆえに、すべての三角形の三つの角は二直角に等しい、またすべての物体は可分であると言ふのは真である。

第五に「#「第五に」に傍点」、私は、

読者がこの上なく完全な実有の本性の  
観想に長くまた多くとどまるように、要  
請する、そして中にも、あらゆる他の本  
性の観念のうちにはたしかに可能的存  
在が含まれるが、神の観念のうちにはし  
かし単に可能的存在のみではなく、また  
実に必然的存在が含まれることを考察



するようになら、要請する。なぜなら、ただこのことから、そして何等まわりくどい議論なしに、神が存在することを読者は認識するであらう、そしてそれは読者にとつて、二が偶数であり、あるいは三が奇数であること、及びこれに類すること、に劣らず、それ自身によつて明かである

であろう。というのは、或る人々にはそれ自身によつて明かであることがらであるのに、他の人々には長々しい議論によつてでないと理解せられないものがあるからである。

第六に「#「第六に」に傍点」、私は、読者が私の省察のなかで挙げたところ

の、明晰で判明な知覚のすべての例、さらにまた不明瞭で不分明な知覚のすべての例を熟考することによって、明晰に認識せられるものを不明瞭なものから直別することに慣れるように、要請する。なぜなら、これは規則によつてよりも例によつていつそう容易に学ばれるから、

そして私はかしこでこのことがらのすべての例を説明したか、あるいは少くとも或る程度触れておいたと思う。

第七に「#「第七に」に傍点」、そして最期に、私は、読者が明晰に知覚したもののうちには決して何等の虚偽も発見せず、反対にただ不明瞭に把握したも

ののうちには偶然によるほか何らの真理も見出さなかつたことに注意することによつて、単に感覺の先入見に基づいて、あるいは何か知られていないものを含む仮説に基づいて、純粹な悟性によつて明晰にかつ判明に知覚せられるところのものに疑いをいれることは、まつた

く不合理であるということ考察する  
ように、要請する。なぜなら、かように  
して読者は容易に後述の諸公理を真で  
疑われないものとして認めるであろう  
から。もつともたしかに、そのうちの多  
くは、いつそうよく説明せられることが  
できたであろうし、またもし私がいつそ

う厳密であることを欲したならば、公理としてよりむしろ定理として提示せられねばならなかつたであらう。

## 公理

あるいは

## 共通概念

一 何故に存在するかの原因を尋ねられ得ないような何物も存在しない。なぜなら、これは神そのものについて尋ねられ得るから、神は存在するため何らかの原因を必要とするといふのではな



く、かえつて神の本性の無辺性そのものが存在するため何らの原因をも必要としない原因あるいは根拠であるゆえにである。

二 現在の時は最近接的に先行する時に依存しない、従つてものを維持するためには、それを初めて作り出すために

よりもいつそう小さい原因が要求せられるのではない。

三 いかなるものも、またもののいかなる現実的に存在する完全性も、無(nihil)すなわち存在しないものを、自己の存在の原因として有することができぬ。

四 或るもののうちに有するいかなる實在性すなわち完全性も、このものの第一のかつ十全的な原因のうちに形相的に、あるいは優越的に存する。

五 そこからしてまた、我々の觀念の客觀的實在性は、この同じ實在性をば単に客觀的にではなくて形相的に、あるいは

は優越的に含むところの原因を必要とするということが、帰結する。そしてこの公理は、ただこの一つのものに、感覺的な並びに非感覺的なあらゆるものの認識が依存するといふほど、認められることが必要であることに、注目しなければならぬ。なぜなら、どこから我々は、

例へば、天が存在することを知るのであるか。それを我々が見るゆえにであろうか。しかるにこの視覚は、観念である限りにおいてのほか、精神に触れない、ここに観念と言うのは、精神そのものに内属するものをいうのであって、室想のうち描かれた像をいふのではない。そし

てこの観念に基づいて我々が天は存在すると判断することができるのは、ただ、あらゆる観念は自己の客観的実在性の実在的に存在する原因を有しむければならぬという理由によるのである。そしてこの原因は天そのものであると我々は判断するのである。その他の場合につ

いても同様である。

六 実在性の、すなはち実有性の、種々の度がある。なぜなら、実体は偶有性あるいは様態よりもいつそう多くの実在性を有し、また無限な実体は有限な実体よりもいつそう多くの実在性を有するから。従つてまた実体の観念のうち

には偶有性の観念のうちによりもいつ  
そう多くの客観的実在性が有し、また無  
限な実体の観念のうちには有限な実体  
の観念のうちによりもいつそう多くの  
客観的実在性が存する。

七 思惟するものの意志は、たしかに  
有意的にかつ自由に（なぜならこれは意



志の本質に属するのであるから、しかしそれにもかかわらず謬ることなく、自分に明晰に認識せられた善に赴く。従つて、もし自分に欠けている何等かの完全性を知るならば、それを直ちに、もしそれが自分の力の及ぶところにあるならば、自分に与えるであろう。

八 いったそう大きなことあるいはいつそう困難なことを為し得るものは、またいつそう小さいことをも為し得る。

九 実体を創造しあるいは維持することは、実体の属性すなわち固有性を創造しあるいは維持することよりも、いつそう大きなことである。しかしながら、

既に言つたごとく、同じものを創造することは、それを維持することよりも、いっそう大きなことではない。

一〇 あらゆるものの観念あるいは概念のうちには存在が含まれる。なぜなら我々は存在するものの相のもとにおいてでなければ何物も把捉し得ないの

であるから。もとより、制限せられたものの概念のうちには可能的あるいは偶然的存在が含まれ、しかしこの上なく完全な実有の概念のうちには必然的にして完全な存在が含まれる。

## 定理一

「#ここから2字下げ」

神の存在はその本性の単なる考察から  
認識せられる。

「#ここで字下げ終わり」

## 証明

或るものが何らかのものの本性ある  
いは概念のうちに含まれると言うこと  
は、そのものがこのものについて真であ  
ると言うことと、同じである（定義九に  
よつて）。しかるに神の概念のうちには

必然的存在が含まれる（公理一〇によつて）。ゆえに神について、神のうちには必然的存在が存する、あるいは神は存在する、と云うことは真である。

しかるにこれは、既に上に第六駁論に  
応えて私が用いたところの三段論法で  
ある。そしてその結論は、要請五におい

て言われたよううに、先入見から解放せられて、いる人々に対してはそれ自身によつて明かなものであり得る。しかしかような明察に達することは容易でないゆえに、我々は同じことを他の仕方でも追求することを試みよう。



## 定理二

「#ここから2字下げ」

神の存在は単にその観念が我々のうちにあるということから、ア・ポステリオに証明せられる。

「#ここで字下げ終わり」

## 証明

我々の観念のいかなるものの客観的  
実在性も、この同じ実在性をば単に客観  
的にではなく、形相的に、あるいは優越

的に、含むところの原因を必要とする

（公理五によつて）。しかるに我々は神の觀念を有する（定義二及び八によつて）、そしてこの觀念の客觀的實在性は形相的にも優越的にも我々のうちに含まれない（公理六によつて）、またそれは神そのもののうちにのほか他のいか

なるものの中にも含まれることがで  
きない（定義八によつて）。ゆえに我々  
のうちにあるところのこの神の観念は、  
神を原因として必要とする、従つて神は  
存在する（公理三によつて）。

## 定理三

「#ここから2字下げ」

神の存在はまたその観念を有するところの我々自身が存在するということからも証明せられる。

「#ここで字下げ終わり」

## 証明

もし私が私自身を維持する力を有するならば、なおさら私はまた私に欠けているところの完全性を私に与える力を有するであろう（公理八及び九によつ

て)。なぜならこれらの完全性は単に実体の属性であり、私はしかるに実体であるから。しかしながら私はこれらの完全性を私に与える力を有しないのである、なぜなら、さもなければ私は既にそれらを有しているであろうから（公理七によつて）。ゆえに私は私自身を維持する力

を有しない。

次に、私は、私が存在する間は、もし  
実に私がその力を有するならば、私自身  
によつて、あるいはその力を有する他の  
ものによつて、維持せられるのでなけれ  
ば、存在することができぬ（公理一及び  
二によつて）。ところで私は存在するが、



しかもまさにいま証明せられたように、私自身を維持する力を有しない。ゆえに私は他のものによつて維持せられる。

なおまた、私を維持するものは自己のうち、私のうちにある一切を形相的に、あるいは優越的に、有する（公理四によつて）。しかるに私のうちには私に欠け

ているところの多くの完全性の知覚と同時に神の観念の知覚が存する（定義二及び八によつて）。ゆえにまた私を維持するものうちにも同じ完全性の知覚が存する。

最後に、この同じものは、自己に欠けているところの完全性の、すなわち自己

のうち形相的にあるいは優越的に有しないところの完全性の、知覚を有し得ない（公理七によつて）。なぜなら、既に言われたごとく、このものは私を維持する力を有するからして、なおさらかかる完全性を、もし欠けているならば、自分に与える力を有するであらうから（公

理八及び九によつて)。しかるにこのものは、いましがた証明せられたように、私に欠けていてただ神のうちに存し得ると私が考えるところのすべての完全性の知覚を有する。ゆえにこのものはそれらの完全性を形相的にあるいは優越的に自己のうちに有し、かくして神であ

る。

## 系

「#ここから2字下げ」

神は天と地と及びそのうちに存する一

切を創造した。なおまた神は我々が明晰に知覚するあらゆるものを我々がこれを知覚する通りになし得る。

「#ここで字下げ終わり」

証明

このすべては前の定理から明晰に帰結する。すなわちこの定理において神の存在することが、我々のうちにその或る觀念の有するすべての完全性が形相的にあるいは優越的にそのうちに存するところの或る者が存在しなくてはならぬということから証明せられた。しかる

に我々のうちにはあるいとも大きな力の、すなわちただこの力がそのうちに存するところのものによつて、天と地、等々が創造せられ、また私が可能なものとして理解する他のすべてのものもこの同じものによつて作られ得るといふほど大きな力の観念が存する。ゆえに神



の存在と同時にこのすべてがまた神について証明せられたのである。

## 定理四

「#ここから2字下げ」

精神と身体とは実在的に区別せられる。

「#ここで字下げ終わり」

## 証明

我々が明晰に知覚するあらゆるもの

は、神によつて、我々がこれを知覚する通りに、作られ得る（前の系によつて）。

しかるに我々は精神を、言い換えると、思惟する実体をば、物体を離れて、言い換えると、何等かの延長を有する実体を離れて、明晰に知覚する（要請二によつて）。また逆に物体をば精神を離れて知

覚する（すべての人々が容易に認容するごとく）。ゆえに、少くとも神の力によつて、精神は身体なしに存することができ、また身体は精神なしに存することができる。

ところでいま、その一が他を離れて有し得るところの実体は、実在的に區別せ

られる（定義一〇によつて）。しかるに精神と物体とは実体であり（定義五、六、七によつて）、そしてその一は他を離れて存することができ（たつたいま証明せられたごとく）。ゆえに精神と身体とは実在的に區別せられる。

註。私はここで神の力を媒介として使

用したが、それは精神を身体から分離する  
ために何らかの異常な力が必要である  
からではなく、かえって私は前の諸定  
理においてただ神についてのみ取扱っ  
たからして、他に使用し得るものを有し  
なかつたゆえである。またいかなる力に  
よつて二つのものが分離せられるかは、

両者が実在的に異なっていると我々が認識するためには、無関係である。

底本：「省察」 岩波文庫、岩波書店

1933 (昭和8) 年 12 月 20 日 第

# 13 刷発行

※原題の副題の「[ DE PRIMA  
PHILOSOPHIA, IN QUIBUS DEI  
EXISTENTIA, ET ANIMAE  
HUMANAE A CORPORE  
DISTINCTIO, DEMONSTRANTUR.]」  
は、ファイル冒頭ではアクセント符号を



略し、「DE PRIMA PHILOSOPHIA, IN  
QUIBUS DEI EXISTENTIA, ET  
ANIMAE HUMANAE A CORPORE  
DISTINCTIO, DEMONSTRANTUR.」  
としました。

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現  
代表記にあらためる際の作業指針」に基

づいて、底本の表記をあらためました。  
その際、以下の置き換えをおこないまし  
た。

「恰も↓あたかも 或いは↓あるいは  
如何↓いか (て) 戴↓いたただ 至つて  
↓いたつて 一層↓いつそう 恐らく  
↓おそらく 拘らず↓かかわらず 且

つ↓かつ 嘗て↓かつて かも知れ↓

かもしれ 蓋し↓けだし 此処・茲↓こ

こ 如↓ごと 毎↓ごと 悉く↓こと

ごとく 更に↓さらに 然るに↓しか

るに 暫く↓しばらく 直ぐ↓すぐ

即ち↓すなわち 是非↓ぜひ 多分↓

たぶん 給↓たま 何処↓どこ 何れ

↓どれ 乃至↓ないし 筈↓はず 甚  
だ↓はなはだ 殆ど↓ほとんど 先ず  
↓まず 復た↓また 間もなく↓まも  
なく (て) 見↓み 尤も↓もつとも  
専ら↓もつぱら (て) 貫↓もら 故↓  
ゆえ 僅か↓わずか」

※読みにくい漢字には適宜、底本にはな

イルビを付した。

入力：京都大学電子テクスト研究会入力  
班（大石尺）

校正：京都大学電子テクスト研究会校正  
班（高柳典子）

2006年1月21日作成

2006年7月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。